

## 1 別れと出会い

\*

街外れにある墓地。大勢の喪服を着た人々が集まっている。誰かの葬儀があつたようだ。鳴り響いていた寺院の鐘の音が空に吸い込まれた後、人々は三々五々この場から去ってゆく。

墓地から少し離れた広場には、数十台の馬車が犇き合うように止まっている。参列者は馬車に乗り、墓地を順番に離れてゆく。

——ここも混んでいるな。

青年は、黒で埋め尽くされた馬車乗り場を眺めながら、小さく溜息をついた。彼の名は、クロード・ローレンという。彼はスーツと同じ黒い髪をしており、肌が白く、目鼻立ちが整った美しい青年だ。クロードは混雑した乗り場に背を向ける。どうやら空いている乗り場を探しているようだ。

今日用意されている馬車は一頭立てだ。屋根の付いた客車は道路の両側面にひとつ

ずつ戸があり、ドアの両サイドには硝子のはめ込まれている。運転席は客車の外に設けられており、客車の座席は向かい合わせに二つ。客は多くて四人までしか乗れない作りだ。馬車は定員になったものから次々と出されている。

クロードは、一台の馬車の前に立ち止まると客車のドアから室内を覗き込んだ。

——先客はいないようだ。

そのことを確認するとドア横の手すりを掴み、戸口に作り付けられている金具のステップを登り客車に足を踏み入れた。室内は天井が低い。頭をぶつけないよう上体を低くし進むと、正面の窓側に腰を下ろした。クロードは一連の動作を流れるようになす。

そしてその最後の動作として、スーツの内ポケットから一冊の本を取り出した。車内に照明はないが、窓から差し込む日の光があれば読めなくはない。片手で器用に本を開き、親指の腹でページを送る。

「お、ローレン、こんな所にいたのか」

客車の外から彼の名前を呼ぶ声が聞こえた。クロードは本から視線を上げると開けたままになっていた客車の戸口を見た。ちょうど中年の男性が室内に上ってくるのが

見える。

「ドクターか」

クロードが『ドクター』と呼んだのは、クロードの家の近所で開業医をしている、ドクター・オラージュEシユラルだ。本日はドクターも喪服を着て正装をしている。だが、どこか締めまりがない。首に締められているネクタイはとんでもなく曲がつっており、彼のトレードマークの白髪交じりの長髪は、櫛を入れた形跡もなく無造作に結ばれたままだ。そして、口の周りには無精ヒゲがそのまま居座っている。こういう場に縁遠い人であるのがよく分かる。

ドクターは、クロードの正面の席に勢いよく腰を下ろすと、口の両端を持ち上げ、人の良さそうな笑みを作る。

「ここ、いいよな？」

クロードは少し長めに息を吐いてから、視線を本に戻した。

「座ってから同意を求めな」

「まあまあ、一人も二人も似たようなものじゃないのか」

ドクターはそういうと体を半身回転させ、座席の頭の辺りに付いている小窓を手の

甲で叩いた。客車の外で馬の準備をしていた運転手がそれに気がつく。

「はい、どうしました？」

「運転手さん、準備出来たら出しちゃって、たぶんこれ以上乗ってこないだろうから  
さ」

「は、はい、分かりました」

「よろしく」

ドクターは、愛想良く運転手に手を振ると、前を向いて座りなおす。

「いいのか、まだ乗れるぞ？」

「構わないさ、お前さんと馬車で小一時間一緒に居たいと思う変わり者、早々見つか  
らないだろ」

ドクターはそういうと、首に絡みつくネクタイを緩めると隣の座席に足を投げ出し  
た。

「……ドクター、俺を何だと思っている？」

「何ってそりや答えは『変わり者の魔族』一択しかないだろう」

「……面と向かって言ってくれるな」

「そう怒りなさんな」

無意識にドクターに鋭い視線を向けていたようだ。クロード本人に自覚はないが、その鋭い眼光はかなり迫力がある。しかし、ドクターはそんなクロードの様子にもどこ吹く風。飄々と椅子の上で伸びをしている。

——まったく。

クロードはドクターの言葉に毒付く反面、心の中では痛いところを付かれたと思っていた。実はクロードローレンは、外見こそ人間と変わらないが、魔力という特有の能力を持った種族なのだ。人間は、彼らを総じて魔族と呼んでいる。

なぜドクターに『変わり者』と言われたかという彼が『人間の街に暮らす魔族』だからだ。

この世界には人間・魔族・精霊の三種族が存在する。現在、魔族と精霊は人間の世界より姿を消し、自分の領土で暮らしている。ここは大陸の南に位置する人間領の街。魔族のクロードがこの地にいることは、それだけで大変珍しいことなのだ。

「勝手にしろ」

クロードは、そう言い捨てるとドクターとの会話を終わらせるため、再び本に視線

を戻そうとした。しかし、再び戸口から新しい声に加わった。

「人間の変わり者代表のドクターにそこまで言われるなんて、今日のローレンは形無しね」

笑い声と共に降ってきた声は、若い女性のものだった。

「お邪魔でなかったら、私も加えていただけませんかしら？」

車内の二人は同時に戸口の方をみた。戸口にはふわりとした長く茶色い髪が舞う。喪服姿の若い女性が、戸口の手すりを掴み客車によじ登ろうとしているところだった。ダニエル・フィノは、裾の長いドレスを身に纏っていた。片手でドレスの裾をたくし持ち、ステップから客車の床に登ろうとしていたが、ドレスの構造が彼女の動きを制限しているらしく、片方の足が床に着けられずにいた。

「ダニエル無茶をするな！」

「これくらい大丈夫です」

「そうは言うが、見ているこちらの肝が冷える」

そういうとクロードは手にしていた本をスーツの内ポケットに戻すと座席から立ち上がり、客車を揺らさないように戸口に近づいた。

「不本意だろうが、少しじつとしていろよ」

クロードはダニエルの腰に手を回すと、彼女を客車内に引き上げ席に誘導する。

「ローレンありがとう」

「どういたしまして」

クロードは、ダニエルのスカートを踏まないように注意しながら隣に腰を下ろした。ダニエルの黒のドレスの胸元には大振りの白い花が飾られている。それは故人の親族が揃いでつけていたもので、彼女も今日の故人の遺族だった。

ドクターはダニエルが乗車してきたので、少し身を正して座りなおした。

「ダニエル嬢、親族は専用の馬車がなかったか？」

「そうね……そんな物もあつたかしらね」

ダニエルは視線を宙に泳がせ返答を濁した。彼女は何かを隠しているように感じる。

「ダニエル。また何かやらかしたな？」

ダニエルはローレンの方を向くと、そばかすの浮く頬を紅潮させる。

「ローレンずいぶん失礼な物言いね！ 今日は何もしてないわ」

——今日はということば、いつもはどうなのだろう。

「……ただ」

「ただ？」

クロードとドクターの声がそろう。

「久しぶりに会った大叔母様達が『結婚はいつするんだ』『仕事はいつまで続ける気だ』と責め立てるから、少し啖呵を切って飛び出して来ただけよ」

——やっぱり。何かしているじゃないか。

クロードはそう思ったが、ここはダニエルに口を出さなかった。

彼女は今、自分の仕事に情熱を傾けている。それを否定されては黙っていられなかったのだろう。ダニエルは普段から丸くぼっちゃりしている両頬をさらに膨らませている。この様子からするにずいぶんと威勢のよい啖呵だったのではないだろうか。

クロードはダニエルの物事をはつきり言う性格が嫌いではなかった。反対にこの華奢な体のどこにそのバイタリテイがあるのかと興味がある。

「同じ年寄り集団でも、こちらの方が何倍も魅力的よ」

ダニエルはドクターに負けず劣らず毒を吐くセンスのある子だった。ドクターはダニエルの言葉に大喜びで高らかに笑い声をあげる。それに釣られダニエルも声を出し



て笑う。

「おい、二人とも墓所で不謹慎だぞ」

「ははははっローレンは固いな。しかし残念だ。ダニエルともっと話をしていたかったが、俺は帰りの馬車で仮眠を取ろうと思っていてな」

ドクターは、そういうと二人分の座席を占領して、体を横たえた。

「ドクター。今晩は夜間診療か」

「そうだよ。少しでも体力温存しておかないと、何かあったときに動けないからな」

「……ドクター。お忙しい身なのに祖父の葬儀に足を運んでいただき本当にありがとうございます」

ダニエルは浮かべていた笑みを消すと、神妙な顔つきでドクターに深々と頭を下げると感謝の言葉を贈った。

「祖父に代わりお礼申し上げます」

「……ダニエル頭を上げてくれ。爺さんには生前何かと世話を焼いてもらったから、これくらい当然さ」

いいんだよ。と言うようドクターはダニエルの肩に手を置く。

「さて、着いたら起こしてくれよ」

「ええ、おやすみなさい」

ドクターは、性格も態度もいい加減だが、医療に関しては誰もが認める腕を持っている。街で当番制になっている夜間診療は、ドクターが先頭に立って始めたもので、自らも月に数度当番を買って出ている。

ドクターの寝息が聞こえる頃、馬車は小刻みに揺れ動きはじめた。

\* \* \*

「改まった席が苦手なドクターが、葬儀に顔を出すなんて、珍しいな」

こちらに背を向け座席に横たわるドクターを見ながら、クロードは呟く。

「……祖父の最後に立ち会ってくれたからだと思おうわ」

「そうか、ドクターが立ち会ったのか」

「ええ、最後の数日はドクターが毎日往診に来てくれていたの」

それは初耳だ。

亡くなったのは彼女の祖父、ヴィクトル・フィン。そしてヴィクトルはクロードの長年の友でもあった。

「ねえローレン、あなたがこの街に住み始めて、どのくらい経つのか？」

「そうだな、五十年くらいか」

「……五十年長いわね」

「そうでもないさ、あつという間だよ。ダニエルもそう思う時がくるよ」

「そうね。でもそれ当分先にとつておくわ。前から聞きたかったのだけど、どうして魔族は人間より歳を取るのが遅いの？」

「さあ、魔族の世界にいるときこれが普通だったから、考えもしなかった」

「若いままでいられて、ずるいわ」

魔族の寿命は、人間の数十倍はある。クロードの外見は二十代前半の青年だが、実年齢は数字の桁が三桁必要になる。

「そう言われても、こればかりは生まれ持った体質なんぞでな。苦情は受け付けない」  
「……じゃあ、話を変えるわ。ローレンはおじいちゃんのこと、良く知っていたわよね」  
「ああ、この街に来てからの付き合いだからな。あの頃のヴィクトルはまだ髪がフサ

フサしていたな」

「嘘！ 私、ツルツルの頭のおじいちゃんしか見たことがない」

「そうか、これはうっかり口を滑らしたか」

「今度、昔のアルバムを漁ってみるわ」

クロードの記憶の底にあるヴィクトルは、若い青年のまままだ。茶色い髪に、若い頃は鼻頭にそばかすがあった。ダニエルの容姿は祖父ゆずりだ。

クロードはヴィクトルが危篤に陥る数ヶ月前、家を訪ねた。久しぶりに会ったヴィクトルは、少し前に会った時よりも更に老け込み、白い影のような老人になっていた。二人はしばらく昔の思い出話をした。しかしクロードはその間、心穏やかではなかった。そこには今までクロードが見ようとしなかったものが、嫌でも見て取れたからだ。

いくら人間領に住んで、人間の友と同じ時を過ごしても、最後は変化のない自分が一人残される。人間領に住むことを決めた時、こういう日が来ることを予め覚悟はしていたはずだった。しかし現実には直面したとき、ヴィクトルに再び会うことを躊躇う自分がいた。

——何でもっと会っておかなかった。近い未来別れが来るのが分かっていたのに。

「……おじいちゃんが生きている間にもっといろんな話を聞いておけばよかったな」

ダニエルの言葉は、自分の気持ちを代弁しているようだ。

「……ダニエル。この馬車に乗った理由、他にもあるだろ？」

「……ローレンには全てお見通しか」

「伊達に長く生きていないさ」

確かにとダニエルが頷く。

ダニエルが叔母達と喧嘩をして飛び出してきたのは本当の話だろう。そして葬儀の列にクロードの姿をみつけ、ヴィクトルの話を聞くため追いかけてきたのだ。彼女の祖父は街の管理管轄をする役所の重鎮として街の安定を支えてきた。ダニエルは、祖父の跡を継ぐべく下積みをしている。女性が役職についたのはまだ前例がない。女の身で同じことを成し遂げようとなると、何倍も努力が必要になる。ダニエルにとって祖父は目標だったのだろう。その目標を失って、喪失感に苛まれている。

窓の景色をじっと見るダニエルの瞳は、若干赤くなっている。涙を堪えすぎて充血しているのだ。

「ダニエル、お前は聡い子だ。帰ったら叔母上達に謝るのだよ。自分を通してばかり

いては、人は着いて来てはくれない」

「分かっているわ、この馬車を出たら気持ちを切り替える」

茶色の意思の強い瞳をこちらに向けてくる。

本当に賢い子だ。ダニエルはすっかり分かっているのだ。祖父を失った喪失感が彼女の封印している気持ちを少し外に放出してしまっただろう。自分には祖父と同じ道を歩むのは無理かもしれない。いつも付きまとう負の思い。他ならぬ肉親に否定されたのが、彼女の心を乱した。駄々をこねた子供を見るかのようにクロードはダニエルの頭を撫でる。

「ローレン、おじいちゃんみたいだよ」

「そうだな、ダニエルは孫みたいなものだ」

「そうね」

馬車の外は若葉が香る春。春の花が優しくそして力強く咲き乱れている。世界はクロードを無視するかのように移り変わっていく。

——こんな景色を、あと何百回見ることになるのだろうか。

魔族の寿命は果てしなく長い、魔族領では、生きるのに飽きてしまう者もいる。自分もいつの日か、景色に心を動かされることも、持っていたものを失う恐怖も分からなくなっているのではないだろうか。

そんなマイナスな思考に囚われていたクロードは、窓の外の異変に気付くのが遅れた。

それは最初、彼の視覚に違和感を与えたに過ぎなかった。

——何かが、おかしい……

ローレンは席から立ち上がり、客車の窓を開け外に身を乗り出した。

「ローレン、どうしたの？」

ダニエルが訝しげにクロードを見上げている。クロードは目を細めて路肩の一点を見ている。

「……人が倒れている」

「何ですって！」

「ダニエル、ドクターを起こせ」

クロードはそう言うと言行中の馬車の扉を開き、音もなく地面に飛び降りた。

「ローレン！」

ダニエルはクロードの突然の行動に驚くも自分のやるべき事を心得ていた。

「運転手さん馬車を止めてください！ ドクター起きて！」

\* \* \*

魔族の五感は人間の何倍も優れている。クロードは地面に飛び降りると馬車の進行方向とは逆に駆け出した。

——見間違いであってほしい。

草原の一角に目を凝らしながら、道を外れて舗装されていない草原に足を踏み入れる。地面を踏みしめると花と草の香りが襲いかかってくる。クロードはその中でも一際生い茂る花畑の中に踏み込むと、強引に周囲の花を掻き分けた。

「……居た」

馬車の上から見たものに間違いはなかった。花に覆われた中に人がうつ伏せに倒れていた。すぐに人間が倒れていると気が付かなかったのは、この人物の髪の色が、一



帯の花と同色だったからだ。

クロードは、タンポポの群生する地面に膝を付いた。

「……死んでいるのか？」

生きているのかと声をかけなかったのは、なぜだろうか。クロードはそう思いながら、生死を判別するため地面に倒れている人の首筋にそっと手を置いた。

「……温かい」

脈も弱いが確かに脈打っている。

「間に合ったか」

安堵のためか、ため息が漏れる。クロードは周囲の草や花を押しやると倒れている人物の肩を揺すった。

「おい、大丈夫か……」

声を掛けるが倒れている人物からの返事はない。下手に動かすのはどうかと思ったが、うつ伏せのままでは外傷の確認が出来ない。

「動かすぞ」

クロードは、声をかけながら肩口に手を差し入れ、地面に突っ伏している身体を慎

重に裏返した。行き倒れていた人物の髪が、クロードの腕の内側に落ちた。髪で隠されていた顔が露わになる。クロードは一瞬息を呑んだ。首筋の辺りまで伸びた金色の髪の間から現れたのは、幼さの残る少女だったからだ。

「女子供がなぜこんな場所に？」

まったく予期していなかったことに、クロードの手が止まった。

少女の瞳は固く閉ざされていた。そのしつかり閉じられた瞼には長いまつげが蓄えられ、すつと通った鼻筋と青白くなっているが形の良い唇が結ばれている。だいぶ衰弱しているが、それを含めても、愛らしい外見をしていた。

これを『美少女』という言葉以外で定義するのは難しい。年の頃はダニエルと同じくらいだろうか。

クロードは辺りを見回したが、彼女の荷物らしきものは見当たらない。服装も軽装でシャツとズボンの組み合わせだ。そして、びつくりしたことに両足は裸足であった。傷だらけの両足は傷口に泥が入りこんでいる。これはまるで何かから逃げてきたような……クロードは負の考えに陥りそうになるのを、頭を振って追いやる。

——こんな場所に寝かせておくわけにはいかない。

地面に寝かせていては体温が奪われてしまう。呼吸が規則正しいのを確認すると、クロードは少女の腰と背に腕を差し入れると抱き上げた。

「……重い」

少女はクロードの予想より重かった。クロードは腕の中の少女に視線を落とした。自分の腕に伝わるこの違和感は何だろうか？ この違和感を列記すると、まず彼女はクロードの知る成人女性の体重よりも若干重い。意識がない人間は元来重いものだが、それを除外してもこの重さはおかしい。そして腕に伝わる感触は女性の骨格とは異なる。まだ発展途上のダニエルの身体でも、多少の丸みがあった。

それらを総合するとこの人物は……。

「……まさか、……こいつ男か？」

その答えにたどりつくまで、ずいぶん時間がかかってしまった。それほどまでに、腕の中の少女いや少年は、儂く可憐だった。何か言い知れぬ思いが胸の中に沸いてきたが、クロードはこちらに向かってくるドクターの姿を見つけると、彼らを呼び寄せた。

「ドクターここだ！」

ダニエルに叩き起こされたドクターは、クロードに追いついてきた。

「た、倒れていたのは、……そ、その子か！」

「ああ、息も脈もある」

「よかった」

馬車で待つていればよかっただろうに、ダニエルは息を切らせながらやってきた。草原を走って来たので、服の裾が泥だらけだ。

ドクターは地面に膝を付くと、クロードに抱きかかえられている少年の手を取った。「ずいぶん衰弱しているな。見つけるのが遅かったら危なかったかもしれない。……それにしても可愛いらしいお嬢さんだな、ローレン」

「ドクター、たぶんこいつ男だぞ」

「嘘、こんな可愛いのに！」

ダニエルは少年を覗き込んで驚きの表情を浮かべる。

「……ローレン、残念」

「何が残念だ！ 早く診てやれ」

「はいはい……」

ドクターは、少年の診察を始めた。大きな外傷はなさそうだ。しかし意識がないのは衰弱が進んでいるためのようだ。ドクターの顔色が曇る。

「ローレン、駄目元で聞くがお前さん回復魔法は使えないのか？」

魔族が持つ魔力は、魔法という形でこの世界に現象化することが出来る。破壊魔法、補助魔法、回復魔法と種類は多岐に渡る。

「残念だが魔法は……それに回復魔法は素質がなくて習得していない」

魔族と言ってもすべての魔法を使えるわけではない。人の性格に個性があるのと同じく、魔力にも個性があった。それにいろいろと制約もある。

「……そうか、やっぱり駄目だよな」

「ドクター。大丈夫よね、助かるわよね」

ダニエルが不安そうな表情でクロードとドクターを交互にみる。ドクターはダニエルに言葉を返さなかった。

「……脈がかなり弱い、このまま運んで街まで持つかどうか。少しでも応急処置が出来れば」

「そんな……」

今日のドクターは、仕事道具の医療靴を持っていなかった。流石に葬儀の場まで持ってきてはいない。

「ドクター、応急処置程度なら、なんとかなるかもしれん……」

「本当か！」

「ああ、だがあまり期待しないでくれよ……」

クロードはそう言うと言の少年の額を手で覆った。するとクロードの手の平がぼんやり光り出したではないか。

「ローレン、何をしているの？」

「魔力を送っている……魔法を作り出す前の何も形のない力だ。よく人間は『手当てする』という言葉を使うだろう」

「うん……えつ、まさかこれが語源？」

「諸説はいろいろあるがな。気休めだが体力の回復ぐらいはできるはずだ」

クロードはゆっくりと自分の魔力を少年に送り続ける。若干ではあるが少年の蒼白だった顔色に赤みが差したような気がする。

ドクターは少年の手を取ると脈を確認した。

「よし、いい子だ。脈がしつかりしてきたぞ」

「良かった！」

ドクターは、少年の手首から手を離すと立ち上がった。

「ローレンすまんが、そのまま魔力を送り続けてくれ！ ダニエル、馬車の運転手にうちの診療所まで馬車を着けてくれるよう交渉してきてくれ」

「分かったわ！」

こういう時のドクターは別人のように手際がよい、ダニエルは、馬車の方へ踵を返すと走り出した。

「ローレン。そのままゆっくり運んでくれるか？」

「ああ」

クロードは額から手を離さないように少年を抱き上げ直すと、地面から立ち上がった。ドクターがその横に付く。

二人は足早にタンポポが咲く草原を後にした。

## 2 たんぽぽと少年

\*

人は、眠りの世界から帰る方法を、どうやって覚えるのだろうか。虚ろな世界と現実の境目は薄いカーテンを引いたように曖昧だ。彼は瞼を薄く開けると、見知らぬ天井が目に入ってきた。世界に音が戻ってくる。時を刻む時計の音と、風が木立を揺らす音だ。虚ろな意識の中、瞬きを数度繰り返してから、そっと視線を動かす。

——眩しい。

窓が見える。薄手のカーテンが引いてあり、室内には日の光が優しく差し込んでいく。ここは白い壁に囲われた部屋だった。

彼は自分の身体が横たえられているのを理解した。身体の横に置かれている手の指先を動かすと、さらりとした布地の感触が伝わってくる。何となく、そのまま手を持ち上げようと思った。しかし、手に力が入らず布地の上に手の甲から落ちる。この時はじめて、自分の身体の感覚が恐ろしく鈍いことに気がついた。ならばと身体を横に



向けようと思ったが、同じく身体にも力が入らない。

彼は動くのを諦め、再び天井を仰ぎ見た。背中から伝わる柔らかい感触。どうやら自分はベッドの上に寝かされているようだ。

——ここはどこだろう？ ……知らない場所だ。

彼は自分が置かれている状況を、すぐには理解することが出来なかった。

「目が覚めたか？」

その声は、あまりに突然降ってきて、正直なところ心臓が飛び上がりそうなほど驚いた。室内の静寂を打ち破る男性の声。彼は慌てて声の方に視線を動かした。ベッドの足側に古ぼけた椅子が置かれている。そこに一人の青年が腰を下ろしているのが見えた。

——いつから、そこに？

人の気配などまったく感じなかった。

椅子の人物に声を掛けようと思ったが、思うように声が出ない。

「……うっ」

口の中がカラカラだった。尋常じゃない喉の乾きは、声帯の粘膜が張り付いて唸り

声をあげるのが精一杯だった。

「……ちよつと待っている」

青年は、椅子から立ち上がると、読んでいた本を棚の上に置き、代わりに水差しの乗った盆を手にした。そしてベッドの横まで歩みよるとマットレスの淵に腰を下ろした。

どうするのだろうと見ていると、水差しの置かれた盆を枕元のサイドボードの上に置いた。そしてベッドに横たわる自分の背中に腕を差し入れ、身体を少し起こしてくれた。

「大丈夫か？ これで苦しくないか？」

声が出ないので、首を縦に振って意思表示をする。青年はそれを確認すると、クッションを背中に差し込んでくれた。これで一人でも身体を起こしていられる。

「いいか。今から水を飲ませるが、ゆっくり飲むんだぞ。ずっと何も口にしていなかったから、身体が受け付けられないはずだ」

そう説明すると、盆の上に置かれた水差しを口に当ててくれた。水差しの水が、ゆっくり口の中に広がる。

「少しずつだ」

水が舌から喉に落ちてくる。何と表現していいのだろうか。これが世に言う命の水。このまま一気に水を飲み干してしまいたかったが、青年によつてそれは止められた。

「……あ、ありが……とう……ございます」

ようやく声が出た。

——自分の声はこんな声だっただろうか？

水を与えられて、意識が少しクリアになつた気がした。目の前の青年をよく見ようと、まだ虚ろな目の焦点を合わせる。しかし、水差しを盆の上に置いた青年は、彼の額に手を置いて視界を閉ざした。熱くもなく冷たくもない調度良い頃合の人肌が額を覆う。

「熱は……ないな」

まだ喉が痛むので、うなずいて見せた。

「どこか痛むところはあるか？」

「……全身」

「だらうな」

そう言うと今度は唐突に額から手を退かされ、青年と目が合う。紫色の瞳がこちらをじつと見ていた。

「あ、あの……」

身の置き所のない恥ずかしさを感じ、思わず視線を逸らしてしまう。

「また横になるか？」

「このままが、いいです」

水を飲むため起こされたが、このまま上体を起こしていたかった。その方が周囲をよく見ることが出来るからだ。

「分かった。だがまだ安静にしている」

「は、はい……」

反射的に答えた。この人から発せられる言葉には、なぜか抵抗が出来ない。それは言っている事が正しいというだけではない、彼の言葉からは何かしらの抑止力的な強さを感じる。目の前にいる青年は最初黒い髪をしていると思った。しかし日の光の中にいると紫掛かって見える。色素の薄い肌は、よく見ると左側の頬に横に伸びた傷がある。髪で隠しているようだが、至近距離のため気が付いてしまった。落ち着いた紫

色のスーツを着ている彼は、まるで絵からでも出てきたような優雅な青年だった。氣後れしてしまうのはそのせいだろう。

「今から医者を呼んで来る。少しの間席を外すが、何かして欲しいことはあるか？」

「……わかりません」

青年は少し困ったような顔をする。

それはそうだ。自分でも『わかりません』はないだろうと思う。しかし本当に何も分からない。

「それもそうか。目が覚めたばかりで状況が分からないか……」

確かにまだ頭が重だるく、意識がぼんやりしている。周囲の情報は目に入ってくるが、自分の事となると霞が掛かったようにぼんやりしている。

「しばらく寝ている。帰ってきたら起こすからな」

青年はそう言ってベッドから立ち上がり、こちらに背を向ける。

「……えっ、あ、待って、待ってください！」

先程まで思うように力が入らなかった手は、いつ復活していたのだろうか？彼は青年の服の裾を強く掴んで呼び止めた。

「んっ、なんだ？ 何か欲しいものでも……」

何故呼び止めたのか自分でもよく分からなかった。本能的に手が動いた。

「す、すみません！……僕は……えっと……あの……」

何か言わなければいけないという思いはあるが、何を話してよいか分からなかった。この胸中に占める不安をどう表現していいのか分からない。

青年は服を掴んでいた手を取り布団の中に戻してくれた。手を取られて気づいたのだが、指先が震えていた。

「……大丈夫だ。何も心配しなくていい、俺はここを出たら知り合いの医者連れて帰ってくる。それだけだ」

青年はまるで子供に言い聞かせるようゆっくり説明をすると、彼の頭を撫でる。寝ていてボサボサになっていた金髪が更に乱れるが、彼はそれが嫌だとは思わなかった。

「落ち着くまで、少し話でもするか？」

「……はい」

青年は彼の返答を聞くと、再びベッドの淵に腰を下ろした。

「さて何から話すか」

「……あの、僕はどうしてここに？」

「お前は、街外れの茂みの中で倒れていたんだ」

「街外れに倒れて……ですか？」

「ああ、偶然俺達に乗った馬車がその場を通りかかってな。お前を見つけた。それで急いで街まで運んだわけだ」

「そ、そうだったんですね……あ、お礼を言っていない」

「礼にはおよばん」

「いえ、きちんとお礼を言わせてください。助けていただきありがとうございます」  
彼は青年に向かい深々と頭を下げた。

「当然の事をしたままでだ。それより何であんな所にいた？」

「それは……」

——そうだ、僕はなんで街外れに倒れていたのだらうか？

彼は必死に頭を動かし倒れる前の記憶を呼び起こそうとした。しかし目覚める前の事を思い出そうとすると、意識全体に霧がかかっているようで、上手く思考がまとまらなかった。

「すいません」

口から出たのは謝罪の言葉だった。

「……まあいい、こちらは別に詮索しないさ」

返答をしない事で、青年に気を使わせてしまったようだ。

「ごめんなさい……」

そういう訳ではないのだ。彼は会話をうまく紡ぐことが出来なかったのだ。だがここでこの青年との会話を終わらせてしまったら、この青年は再び席を立ってしまう。その前に聞いておきたい事がある。

「あの、こちらから返答しないで……質問するのは大変失礼な事だと思うのですが……教えていただきたい事があります」

勇気を振り絞って会話を紡ぎだす。

「なんだ？」

「あの、あなたは誰ですか？」

「そういえば名乗っていなかったな、これは失礼した。俺はクロード・ローレンという。この街には少し長く住み着いている」



クロードはそういうと右手を差し出した。握手を求められているのだ。彼は布団から右手を出すと、クロードの手を握った。先程の指先の震えはもう止まっていた。

「……クロードははじめまして。僕とは初対面ですよね？」

「ああ」

「……そうですか」

「ところでお前は？」

「えっ？」

「お前と言うのもなんだ。名前ぐらい教えても差し支えないだろう」

「……名前ですか、僕の名前は……」

「それもだんまりか？」

「いえ、違います！ 違うんです」

「何が違うんだ？」

彼は名前を言いたくないわけではなかった。言いたくともそれが……

「分からない」

その言葉を口にした瞬間、背中から嫌な冷や汗が伝い落ちた。頭の芯から血の気が

引くような気分の悪さ。彼は耐え切れず顔を両手で覆い、クッションに額をつける。その様子を見ていたクロードは、慌てて肩を支える。

「どうした、気分が悪いなら少し横に……」

「……だ、大丈夫です」

身体の震えが止まらない。この震えをどうかしたくて、支えるクロードの腕を掴む。

「無理をするな！ 顔色が真っ青だぞ」

心配しているクロードの顔が横にある。

「クロード、僕は、……」

彼はクロードをじつと見据えた。そして震える唇をぐつと横に強く結んでから、口を動かしはじめる。

「自分の名前が分からない」

「……はっ？」

クロードは目を見開き、声を詰まらせている。

「ちゃんと指の動かし方も分かる。水の飲み方も。でも自分の事だけが霧が掛かった

みたいに分らないんです」

彼は両手を開いたり閉じたりしてみせた。その動きに何も問題はない。自分の手の平から、クロードの方に視線を戻すと、クロードは驚きを通り越し顔から表情をなくしていた。当たり前だろう。

「なら、さっき聞いた街外れに倒れていた理由。言わなかったのではなく、分からないのか？」

「はい」

「それは冗談ではなく？」

「すいません、残念ながら冗談ではないです」

クロードは、今度は難しい顔をしてこちらを見ている。こんな顔をさせている元凶はまぎれもなく自分である。

「……記憶喪失だと？」

記憶の喪失。その言葉は現状を正しく表している。彼は今日この時以前の自分に關する記憶を失っていた。

\*  
\*  
\*  
\*

クロードは軽い眩暈を感じた。

街外れで拾った金髪の少年は、話し方に擦れている部分が見受けられない。表情と言葉にも裏表がなく、自分の思っていることを素直に口にしている。立ち居振る舞いからも育ちの良さを感じる。怯えている素振りを見せるところから、何かトラブルに巻き込まれたのだろうと想定していた。まずは落ち着かせて身元を聞き出そうと、会話を続けてゆくうちに、自分がとんでもないモノを拾ってしまったことに気が付いた。

『自分の名前が分からない』

いわゆる自分は記憶喪失だと言うのだ。

「はああ……」

クロードは、肺の中の息を全部吐き出すほどのため息をついた。

——まあ、一人頭を抱えていても、どうしようもないか。

最初は少々混乱したが、まずは医療の専門家に相談するべきだと考えに至った。それに少年が目を覚ましたら、ドクターを呼びに行く手はずになっていた。

この金髪の少年の倒れていた状況は、大変特殊だった。少年の身なりは軽装で両足には靴がなく、どう見ても何かから逃走してきたようにしか見えなかった。このアルデウイナという街は、一昔前よりはだいぶ治安が良くなったが、今でも違法な人身売買や誘拐の類がなくなつたわけではない。この少年が前者ならば保護してやらなければ、そして後者ならば一刻も早く家族と連絡を取り安心させなければならぬ、どちらにしても不特定多数の目のある診療所ではなく、クロードの自宅に匿う方がよいだろうと結論に至つた。特にその案を強く押ししたのはダニエルだった。役所に勤める彼女は、この手の事案を担当に持つこともある。犯行グループを捕縛するチャンスだといふのだ。

彼女は、不敵に微笑み目を光らせた。少し前まで馬車の中で半ベソをかいていた人物だとは思えなかつた。

クロードは、自宅を出るとドクターの診療所へと足を運んだ。しかし診療所の入り口には、『休憩中』という立て札が掛かっておりドクターは留守だった。クロードは懐より時計を取り出す。時刻は二時過ぎを指していた。この時間帯は、午後の診察までの休憩時間だ。ドクターは遅い昼食に出かけているに違いない。

クロードがようやくドクターを見つけたのは、近所の食堂の片隅だった。ドクターは山盛りのサフランライスとチキンの煮込みを前に、幸せそうに食事をしていた。

「ドクター探したぞ」

「お、ホーレンひゃな……いか！」

ドクターは口の中に食べ物を頬張ったままクロードに返事をする。

「口の中の物、食べ終わってから話せ！」

言っている事は分かったが、取りあえず苦情は伝える。クロードはドクターの真向かいの席に腰を下ろした。そして周囲を見回してから、小声でドクターに話しかける。

「家に引き取った奴、目を覚ましたぞ」

ドクターはスプーンを皿に置くと、口元を横に引いて笑みを作る。

「そうか、眠り姫が目を覚ましたか！」

ドクターは少年のことを『眠り姫』と隠語を使う。確かに少年の外見は少女のよう  
で眠り姫のようだったが、本人が聞いたらどう思うだろうか。

「容態はどうだ？」

「安定している」

「ならこの昼飯が終わったら、すぐ診に行こう」

「そうしてくれると助かる。あと実は……」

クロードは、予備知識としてドクターに少年の状態を話そうとした。しかし、背後から人が近づいて来る気配を感じたので、しばし会話を中断させることにした。

「ローレン、アンタが見つけた子、目を覚ましたのかい？」

クロードの背後から現れたのは、この食堂の女将ロクサーヌだった。どうやらクロードの注文を取りにきたようだ。

「女将か」

このロクサーヌは、あの場に居た三人以外で少年の存在を知っている数少ない存在だ。ロクサーヌが経営している食堂は、クロードの自宅からすぐの場所にある。クロードは食事の準備が面倒なときなどは、この食堂に足を運ぶことにしている。そのためロクサーヌとは付き合いが長い。彼女は、普段はお喋りが好きな女性だが、人情にも厚くおまけに度胸がある。彼女に少年の事情を話しても、決して口外することなく、それとなく、手助けをしてくれている。

「ああ、さつき目を覚ましたぞ」

「それは良かったねえ！　いつまでも意識が戻ったと連絡がないから、心配してたんだよ」

「いろいろすまないな」

「いいってことさ。ところで容態はどうなんだい」

「そうだ、その話の途中だったな」

ドクターは食事をしながらクロードの話を聞くようだ。ライスを山盛りにしたスプーンを口に運ぶ。

「まだ身体を思い通りには動かせないようだった」

「そうかい、まあずっと寝ていたら当たり前かねえ」

「その辺りはドクターに診てもらえば問題ないと思うのだが」

「なんだい、その何か含んだ言い方は、はっきり言っておくれ」

「それがな、女将は『記憶喪失』というのを知っているか？」

「記憶喪失だど！」

クロードがロクサーヌと会話をしている間、黙々と食事に取り組んでいたドクターは、『記憶喪失』という言葉に反応した。



「ローレン！ まさかあの子記憶喪失なのか！」

ドクターは、口に含んでいた食べ物を吹き散らかしながら、クロードとロクサーヌの会話に乱入してくる。

「ドクター、汚いぞ」

「これはすまん、すまん。それでローレンどうなんだ？」

「ああ、名前と倒れていた事情を聞いてみようと思っただが、思い出せないそうだなんと！」

「ローレン、その子嘘をついているのかもしれないよ。何か事情があつて自分の事が言えないのかも」

ロクサーヌは、心配そうな表情でクロードを見ている。

「それが嘘をついている感じでもなくてな」

「んん、目を覚ましたばかりだしな、ショックな事があつて一時的に記憶が混乱しているのかもしれないな。本物の記憶喪失なら、是非診察してみたい」

「ローレン、どうするんだい？」

「とりあえずドクターにこの後診察に来てもらう。考えるのはそれからだ。女将、病

人用の食事を一人前テイクアウトだ。それから俺の昼飯を適当に頼む」

「はいよ。ロクサーヌにまかしときな」

ロクサーヌは、クロードの注文を聞くと、まるで踊るかのように厨房に歩いていった。クロードは、そんなロクサーヌの後ろ姿を、微笑ましく見送った。

ドクターは、何が嬉しいのか、笑みを浮かべながら皿の上に残っていた食事を片付け始めた。

「燃料充填終了！ ごちそうさまでした！」

ドクターはそういうと空になった皿にスプーンを置き、ごちそうさまと手を合わせる。

「さて、ひとつ走り診療所まで診察鞆を取りに行ってくるか。食後のコーヒーはローレンの家でいただくとしよう」

「おいおい、勝手に決めるな」

「それくらいいいだろう」

ドクターは席から立ち上がり、ポケットからコインを取り出すとテーブルに置いた。丁度ロクサーヌがクロードの前にスープと副菜の季節野菜の盛り合わせを運んで

きた。

「女将、御代はここに置いておきな。今日も美味かったよ」

「ドクター、いつもありがとうね」

「そういえばローレン、その後ダニエルからの連絡はあったか？」

「いや、ない」

ダニエルは職場のネットワークを使い、少年の家族から被害の届出が出ていないか調べてくれているが、まだ有力な情報は届いていない。

「これは場合によっちゃ、大変な事になるかもしれない……じゃあ後でな！」

ドクターは不吉な事を言い残して食堂から出て行った。

「ローレン、しばらく退屈せずに済むじゃないかい！ 良かったねえ」

「……そのようだな」

クロードはロクサーヌが運んできた野菜の盛り合わせにフォークをさして口に運ぶ。先ほどから、魔族の勘というのか、厄介事の匂いがブンブンしてくるのが感じられる。

人間領は毎日退屈しらずだ。

\* \* \* \*

彼はクロードを送り出した後、また眠りの世界に落ちてしまった。この部屋は、春の優しい日差しが差し込んで来て、頬をさする風もまた心地がよかった。背中に差し込まれたクツシヨンは柔らかく、身体をいい塩梅に支えてくれる。

——いつのまに眠ってしまったのだろう。

彼は自分の傍らで話し声をするのに気づいた。

「あ、すみません。僕、眠って……」

「おや、ごめんよ。起こしちゃったな」

視線に飛び込んできたのは、クロードではなく白衣姿の中年の男性だった。彼は医療器具をサイドテーブルに戻しているところだった。

——この人がドクターだろうか？

この家は、クロードの自宅兼仕事場であることを教えてもらった。彼以外は誰も住んでいないらしい。

「眠り姫、まだ寝ていて構わないよ」

——ね、眠り姫？

「あ、あの……」

ドクターらしき人物に話しかけようと思ったが言葉が出てこない。何を話していいのか、まるで自分は人見知りをしている子供のようだ。

そのときだった、すぐ横から知った声が上がった。

「ドクター、無駄口をたたかないで、さっさと診察を続ける」

「そう急かすな」

彼は、声のした方に顔を動かした。そこには、クロードの姿があった。クロードは腕組みをして壁に寄りかかっている。まただ、彼は同じ部屋に居ても気配を感じる事がない。

「あ、クロードお帰りなさい」

「ああ」

クロードは特に表情を変えてもなく、返事をしている感じだ。クロードのこの仏頂面を見て、少し安心する自分がいるのに気が付く。

「ローレン、なかなか可愛い子じゃないか。お前さんには勿体ないんじゃないのか？」

「ドクター、そういう冗談は間に合っている」

ドクターは、クロードの事をローレンと呼ぶようだ。

この二人は親しい様子だ。彼は二人の会話に割り込むことはせず、話の流れをみていた。

「ちえっ、どうしてお前さんはそうノリが悪い」

ドクターは、クロードとの会話をきりあげると、再びこちらに視線を返す。

「行き倒れ君失礼した。私はオラージュⅡEⅡシユラールだ。この街で二十年ほど医師をしている。よろしく頼むよ」

行き倒れ君とはどうやら彼の事のようにだ。

「は、はい、よろしくお願います。ドクターシユラール」

「ドクターで構わんよ。この辺りの人間はそう呼んでいる」

「では、ドクター」

「よし、受け答えもしっかりしているね。少し触るよ」

ドクターは彼の両頬を包むように手を置いた。医者の手は冷たいのではと勝手なイメージを持っていたが、ドクターの手は大きく温かい。ドクターは、指の腹で首の辺

りを確認しているようだ。初めて会うドクターに人見知りをしていたが、少し気持ちが解れた気がした。

「こちら問題なし。さて、私としては君の状態を少し説明したいのだが、聞けるだろうか？」

ドクターは先ほどまでのおどけた口調から一変し、優しくだが真面目に話しかけてくる。

「はい、大丈夫だと思います」

「そう緊張しなさんな、楽な気持ちで聞いてくれ」  
彼は、コクリと頷く。

「まず君を発見した時だが、衰弱が激しく危険な状態だった。ここに運び込んで今日で丸五日間意識がなかったことになる」

「そんなにですか？」

「そう、だがもつと前からあの場所に倒れていたかもしれない。だから油断せずしっかり治す事、いいかな？」

「はい」

「よろしい。だが気を落さんでもいいさ。若いんだ。しつかり食べて寝ればすぐ元に戻るさ。あと両足にある裂傷だが……」

ドクターはそう言うのと、彼の身体に掛けられていた上掛けを足の方だけ剥いだ。シートの上に揃えて置かれている両足は、つま先からふくらはぎまでに白い包帯が巻かれていた。

寝ていて痛むと思ったが、まさかここまで痛々しい事になっているとは予想していなかった。

「菌が入って熱が出るかと思ったが、薬が上手く効いたみたいだ。まだ数日は痛むだろうが、室内くらいなら歩いても構わないよ」

「……は、はい」

彼は包帯を巻かれた足を少し動かしてみた。身体が重く動かすのが辛いのは相変わらずだが、足を動かすと引きつるような痛みが走る。ドクターは裂傷と言っていたが、傷を作った記憶がないので、どんな傷があるのか気になるが、この包帯を取る勇氣はない。

「あと一週間もすれば普通に生活出来るようになるかな」



「はい」

「大丈夫かい？ さつきから『はい』しか話していないけど……」

確かに先ほどから『はい』しか言っていない。自分の説明を聞いているのだが、どこか実感が沸かないのだ。

「……大丈夫だと思います。ドクターの説明で自分の身体の状態は理解出来ました。でも何で倒れていたのか、足が傷だらけなのか理解出来なくて……」

「ローレンから聞いたよ。記憶がないそうだね。今も駄目そうかい？」

声を出して肯定するのが怖くて、首を縦に振ってドクターの質問に答える。

「そうだよな……そうだローレン、この子に何か名前をつけてやってくれ」

突然話をふられてクロードは慌てたように、寄りかかっていた壁から離れ、ドクターの背後に歩み寄ってきた。

「唐突なんだ」

「いや『君』や『この子』と呼ぶのはどうも他人行儀で良くない、自分の事を思い出すまでの間、仮の名前があった方がいいだろう」

「それはそうだが、なんで俺が？」

「最初に見つけたのはお前さんだろ」

「そうなんですか？」

——初耳だ。

馬車で通りかかって見つけたとだけ聞いたけれど、クロードが自分を見つけてくれた張本人だとは聞いていなかった。

「俺とローレン、もう一人ダニエルという女性の三人で同乗していたが、その時俺は車内で寝ていたもんで、詳しい状況は知らないが……ローレン、お前さんが見つけたんだったよな？」

「ああ」

「本当にありがとうございます」

「いやいや、これしき大したことじゃないさ」

「礼はさつき聞いた」

「……ホント、お前さんはつれないねえ」

クロードは、ドクターを無視するかのようには、ベッドの横に歩み寄ってきた。そしてスプリングの足側に腰を下ろした。

「……なあ、お前。本当に思い出せないか？」

突然話題が振られる。クロードは足を組んでこちらを見る。

「……え、あの……」

二人から同時に注がれる視線が痛くて下を向くしかなかった。

——なぜだろう、目頭がやけに熱く感じる。

懸命に何かを思い出そうとしても、焦るばかりで思考がまとまらない。せめて名前の綴りが浮かんでこないか考え右手の指を動かしてみるが、虚しく宙を空くだけだ。

「はははっ……」

不安な気持ちをかき消すため、声を出して笑ってみる。それは到底笑い声のレベルではない。両手を強く握り締める。

——僕は、いったい何者なんだ……

「……ご、ごめんなさい」

そう声を絞り出すのが精一杯だった。他に言うべき言葉があったかもしれないのに、何も浮かんでこない。彼は、自分が置かれた立場の異常さに今更ながら気がついた。

普通ならその場所には、記憶というものが埋まっていたはずだ。でもそこに今ある

のは……底なしの闇。

こめかみに汗の粒がにじみ出て、拳の上に落ちる。

——……誰か助けて

救いなんてあるわけがない。でも、助けを求めてやまない。しかし、それは突然降ってきた。本当に予期もしないほど突然に……

「……『フルール』だ」

クロードが呟いた。

「へっ？」

突然言われた単語を聞き取ることができなかった。俯いていた顔を持ち上げた。そこにはスプリングの上で足を組んで座っているクロードが視界に入る。

「当分の間、お前の名前は『フルール』だ」

「フルール？ ……それは、僕の名前、ですか？」

「不満か？ だったら他に……」

「いいえ！」

——それがいい

そう素直に思った。

「ならそれで決定だ」

「はい」

「よろしくな、フルー」

フルーと呼ばれ、頭にクロードの手が置かれる。

「はっはい、こちらこそ、よろしくお願いします！」

「……ローレンお前さ、俺よりセンスなかったのな」

今まで黙って様子を見ていたドクターが、クロードに向かって呟いた。

ドクターは、診察のときは『私』と自分を呼んでいたが、クロードと話をする時は

『俺』になるようだ。

「悪かったな」

クロードの表情は実に不機嫌そうだ。

「……こういうのは苦手なんだ」

「あのクロード、僕は気に入りました！」

フルーの頭から手をどかすと、クロードはベッドから立ち上がった。

「ローレン、フルールの意味は『花』だろ？」

「ああ、こいつを見つけた場所が辺り一面花畑だったからだな。そこから取った」

「なるほどね。ということはあだ名はさしずめ『花ちゃん』だな」

「ドクター、あの僕は男ですけど？」

「別にいいじゃないか、似合うから！」

ドクターそう言うのと盛大な笑い声を上げる。

「……酷いなあ」

ドクターに抗議をするが、何故か一緒になって笑ってしまふ。これは先ほどの嘘くさい笑い声ではなく、本当の笑みだ。

なぜだろう。名前を貰った瞬間、フルーは心の中で重く押し掛かっていた物が軽くなった気がした。これは気のせいかもしれない、でも笑顔を作る元気が生まれたのは事実だ。まるで、魔法を掛けられたような不思議な気分だった。

「花ちゃんを花に例えると、髪の色から察するにタンポポだな」

「タンポポ……」

フルーの髪は、金髪というには少々黄色みをおびすぎている。おまけに毛先はオレ

ンジ色が強い。確かに色だけを見るならば、タンポポという表現は正解だ。

「タンポポは凄いで。別目『ダン||ド||リオン』ライオンの歯という意味だ」

「強そうですね」

「だろ！ おまけに菓にもなる優れたものだ！ さて、和んだところで問診を続けようか」

「はい、よろしくお願いします」

「なあ、ドクター」

ドクターと楽しく談笑をしていると、今まで黙っていたクロードが会話に入ってきた。

「なんだローレン？」

「その問診とやらが続くようなら、俺は下に降りていていいか？」

「ああ、構わないよ」

クロードはドクターの言葉を聞くと、背を向け扉の方に歩き出した。

「仕事部屋にいるから、終わったら声をかけろ」

「了解、そうそうローレン、俺のコーヒーはブラックでいいからな」

クロードは丁度扉のドアノブを握ったところだったが、こちらを振り返る。

「……家には、お前に出す茶など置いてない」

そう言うところクロードは、さっさと扉の外に出て行ってしまった。

「言ってくれるな」

クロードが退出してから、フルーはドクターを質問攻めにした。

「この街はどういう所なのでしょうか？」

「大陸<sup>アムニ</sup>の南側にあるアルデウイナという街だ。正式名は独立自治商業都市アルデナと長つたらしい。アルデウイナは女神様の名前なんだとさ」

「へえ」

「東の海から太陽が昇ると、この街は目を覚ますんだ」

フルーはドクターが自慢げに話す街の様子に耳を傾けた。女神の名を頂くこの街は、人の活気に溢れているようだ。海に面し広い平地は、大型の船が着ける港になっており、北側の平野には隣国へと続く街道と鉄道が敷かれている。斜面が付いた土地には、白い壁の建物が建っていて、住居や商店が立ち並ぶ。



フルーは目を瞑りながら街を想像する。実際に見てみたいと思うが、今の身体の状態で、外に出るのは当分無理そうだ。少し残念に思う。

「早く元気になるたい気分になれたかな？」

「はい、早く外に出てみたいです」

「その意気だ……花ちゃん、ローレンの奴は、口では悪態をついてみせたりするが、結構律儀で優しい奴なんだ」

「それは、なんとなく分かるような気がします」

クロードの態度は素っ気無く、一見すると冷たく見えるが、対応はとても丁寧で親切だ。フルーはクロードをとて悪い人とは思えなかった。

「あの、ひとつ疑問に思っていることがあるのですが」

「なんだい？」

「ドクターとクロードとはどういった関係なんですか？」

「関係と言われると返答に困るな」

「変なことを聞きましたか？」

「いやいや、あいつとは付き合いが長いんでな。今更関係と言われても良い言葉が…

…浮かばないな」

「そうなんですか」

「ローレンからしてみれば、俺なんか生意気なクソガキのままなんだろうな」

「へっ、ドクターがクソガキですか？ クロードじゃなくて？」

ドクターはフルーの方を見て、目をぱちくりさせたかと思うと数秒沈黙した。

「そうか、花ちゃんはローレンの正体聞いていないのか」

正体とはまた大仰な言い方だと思った。

「クロードに何か秘密でもあるのですか？」

「いったい彼に何があるというのだろうか。」

「なーに、大した事じゃないから本人に聞くといい」

ドクターはただ楽しそうに笑うだけで、教えてくれようとしなない。

——すごく気になる。

その後、いくつか質問をしていると、二階の部屋に微かだがコーヒー豆を挽いた香りが流れ込んできた。

「そろそろ、コーヒーが入るかな。ほらな花ちゃん、ローレンは律儀だろう」

「本当に」

フルーは小さく笑うことでドクターに返事をした。ドクターは一緒に一階に下りてみないかと提案をした。

「トイレ洗面は一階にしかないからな、その足で歩く練習だ」

そういうので、多少無理があつたがベッドから立ち上がるとドクターの肩を借りて部屋の外に出てみた。

足元はまるで雲の上を歩いているように不安定で、一步一步に気持ちを入れないとすぐ倒れてしまいそうになる。おまけに体のあちこちが痛む。ドクターは途中、引き戻すかと聞いてきたが、痛みより部屋の外への興味の方が勝っていたので、首を横に振った。

扉を開けると、当たり前だが廊下があつた。廊下にはこの部屋以外に四つ扉がある。そして廊下の中央に階段が設けられている。この家は想像していたよりもかなり広いようだ。

一階に行くには、この少々急な階段を下りなければならない。フルーは一段一段手

すりとドクターの肩を借りて、降りてゆく。それだけの事なのに額には薄っすら汗が浮いてくる。

「リビングに行く。こっちだ」

ドクターはこの家の間取りをよく熟知しているようで、階段を下りるとリビングにつながる扉を開いた。

リビングは、とても明るく暖かかった。春先の夕方は冷えるので暖炉に火を入れたのか、室内から火がチロチロと燃える音が聞こえてきた。

「ドクター、動かしても大丈夫なのか」

また気配もなく、クロードは突然現れる。だいぶ慣れてきたので、最初よりは驚かなくなってきた。ドクターはクロードの方を見ると、気の良い笑顔を向ける。

「リハビリ、リハビリ。それでこっちでいいんだよな？」

「ああ、リビングに用意してあるぞ」

リビングに入ると、暖炉の前に応接セットのソファが置かれている。長いソファに小さいものが二つ。木の床に落ち着いた色合いの絨毯が引かれている。

この部屋は庭側に大きく窓が作られており、庭の緑を見るのに最高のロケーション

だ。

「花ちゃんは、ここがいいかな」

ドクターは、フルーを一番大きいソファアにゆっくりと座らせて、自分はその隣に腰を下ろし彼の背中を支えた。

「ありがとうドクター」

ソファアに合うローテーブルの上には、整然とコーヒーカップが並んでいた。

「残念だけど、花ちゃんはまだ刺激物はダメだからね」

「はい」

フルーは素直にドクターに了解の返事をした。しかし本音は少々残念でもあった。部屋の中に漂うコーヒーの香りはとても魅力的なのだ。ドクターはコーヒーカップにコーヒーを二人分注ぐ。それを羨ましげに見ていると、目の前に大振りのマグカップを差し出された。

「お前はこれな」

クロードがフルーの前にマグカップを差し出した。

「熱いぞ、持てるか？」

「ありがとうございます」

フルーは恐る恐る手を差し出すとカップを受け取った。カップの中身をのぞくとそれは茶色い液体が並々と注がれている。

「具なしの野菜スープだ。回復食だから味付けは薄めらしいぞ」

クロードは、カップの中身を説明してくれた。フルーはカップの淵に鼻を付けた。熱い湯気が顔にかかる。カップの湯気を鼻から吸い込むと、野菜とブイヨンの良い香りが鼻の奥に充満する。

「いただきます」

熱いので何度か息を吹きかけてから、ちびりちびりと口に含んだ。

「……おいしい」

喉の奥に薄めのスープが染み込む。味付けは薄めと言っていたが、今の自分には丁度よかった。たぶん久しぶりであろう塩気のある暖かい食べ物の味に、涙が出そうになり、声が震えた。

ドクターは、その横でコーヒーカップを取り上げると、暢気にコーヒーをすすする。「うーん、ローレン豆変えたか？」

「……気分転換に」

「ところでローレン、これからどうする？」

「何がだ？」

クロードは、自分のカップを取り上げると、ドクターの真向かいの席に腰を下ろした。

「花ちゃんだよ、これからどうするんだ？」

クロードは、コーヒーを口に運びながらソファアに寄りかかった。

「……そうだな、しばらく家に置いておくしかないだろう。その先は、その時考える  
さ」

「やっぱりそれしかないか」

フルーは自分の対応を話し合う二人に割って入る。

「あの、そこまでご迷惑はかけられません！」

クロードはドクターからフルーに視線を移す。

「じゃあ、どこか行く当てでもあるのか？」

厳しい正論が飛ぶ。

「それは……」

あるわけがない。名前さえ思い出せない現在の状態で、行く当てなどない。

「ならここにいろしかないだろう」

「はい……」

フルーはそれ以上反論することは出来なかった。今は、この場にいる二人に従うしかない。

「そうなるのだ。一つ確認しておきたいことがある」

クロードが改まった口調で、フルーに語りかける。

「確認、ですか？」

——何だろう。

「ここは俺が住んでいるわけだが、『魔族』と同居するのに抵抗はあるか？」

『魔族』ですか？」

「そうだ、魔族」

魔族とは五百年ほど前人間領を植民地として支配していた種族の事だ。人間領のありとあらゆる物を支配し利用し虐げていた。今でも各地で悪の象徴としての伝承が残



る種族だ。五百年前突然自分達の領内に戻ってそれで降出てこなくなった。今では人間領で魔族をみることはない。そんな存在はいなかったのではないかという意見さえ出ているほどだ。

「花ちゃん、これがローレンの正体だよ」

ドクターが会話に助け船を出す。先ほど二階で話した事を指しているようだ。

「……まさか！」

「そう、俺は人間じゃない魔族だ」

フルーは、驚きのあまり手に持っていたカップを取り落としそうになった。少し中味が手の甲に掛かる。

「あちっ！」

「大丈夫か？」

「あ、はい……それより、本当なんですか！」

「ああ」

「花ちゃん本当だよ。ローレンはこの街に五十年ぐらい前から住んでいるらしいが、俺が子供の当時から外見が変わっていない」

思いもしなかった事実を聞かされて驚くばかりだ。

「じゃあクロードは、本当は幾つなんですか」

「歳か、……途中から数えていないからな。たしか二百五十くらいか、それ以上だったはずだ。これでも魔族領では若手だぞ」

「に、にひやく……ごじゅうう？」

とんでない数字を聞いて、フルーは大きな目を更に大きく見開く。

「ありゃー、花ちゃん驚いちゃったか」

「ドクター普通はこういう反応をするのが至極当然なんだ」

「そうなのか？」

「この街の住人は、俺の正体を忘れているとしか思えないほど、魔族使いが荒い」

「それはお前さんが人、じゃなかった魔族がいいからだろ」

ドクターはお得意の笑い声を上げる。クロードはドクターの笑い声を迷惑そうな顔で受け流すと、フルーの方に向き直る。そして真面目な顔で語りかける。

「フルー、もし俺が恐ろしいというなら、この家以外に住む場所を考えよう」

フルーはクロードをじっとみた。

——クロードと自分、どこが違うだろうか？

何も言われなければ、クロードが魔族だと気づかなかった。彼は人のような気配は感じない、鋭い目線で見つめられれば圧力のようなものを感じる。だがそれが恐ろしいかと聞かれれば……恐れはない。反対に目を覚ましたとき、傍に居てくれると安心させた。ならば答えは決まっている。

「怖くないです」

フルーはスルリと返答を返した。

「面と向かって言われなければ気づかなかったくらいですから」

クロードは自分を真っ直ぐ見てくるフルーを見て、視線を逸らしてため息をつく。

「はあつ……また魔族を恐れない人間が増えたか」

「花ちゃん、居候試験合格だね」

「そうなんですか？」

「……とりあえずよろしくなフルー」

「は、はい！ よろしくお願いします。動けるようになったら何でもやります！」

フルーは、頭をペコリとさげた。

「まあ、そのつもりだ。仕事の雑用を手伝ってもらおうぞ。うちは働かざる者食うべからずだ」

「ローレンのところは、沢山仕事があるからな」

「お手柔らかにお願いします」

この日この瞬間から、『フルール』という名の少年の人生が始まった。

## 3 泥棒と林檎

\*

「ど、泥棒よ！」

街の広場に女性の声がこだまする。

アルデウイナの東側、港の商業地域は、アルデウイナの中で治安が一番悪い。置き引き、スリ、ひったくりの類は日常の光景だった。

そして、今しがた荷物をひったくられたのは小柄な老婆だった。背後から荷物を奪われ、その拍子に身体のパランスを崩し地面に転倒した。立ち上がり盗られた荷物を追おうとするが、ひったくり犯は既に十メートルは先におり、今にも街の雑踏に消えかけている。

「だ、誰かあ捕まえておくれ！」

老婆は周囲に助けを請うが、傍で見ていた人間は、一瞬彼女を見るも、ばつが悪そうに視線をそむける。

「ばあさん運が悪かったな。諦めろ」

中には親切に手を差し伸べ立ち上がるのを助ける者もいるが、諦めるように促すだけだ。老婆は肩を落とす。

「そんな、あれには大事なものが！」

「おばあちゃん！ ちよつとそこで待っていて！」

その声は老婆の背後からしたかと思うと、次の瞬間金色の光の筋が老婆の横を猛スピードで走り抜けていった。老婆は何が起きたのか、一瞬よく分からなかった。

「へっ……えっ？」

遠巻きに様子を見ていた人々が、面白そうな物を見つけたと集まってきた。

「お、これは面白そうだ」

「ばあさん、あの子ならもしかしたらもしかするぞ」

老婆は周囲が言っている事がさっぱり分からず、自分を取り囲む人々を見回すことしか出来なかった。

フルーは、石畳の道を全力で蹴った。それに合わせて、靴底の小気味良い音が響く。

日中の港の近辺は、この時間帯が一番の人出だ。人にぶつからないよう人の波を縫うようにして、泥棒を追いかけける。人混みを上手く歩くには、前に行く人のつま先を見るといいと教わった。人は行く方向を変える時、まずつま先がそちらに向く。

「ごめんなさい、ちよつと通してくださいね！」

目の隅にひつたくり犯を外さないようにしながら、足元を確認し道を進んで行く。しかしさすが相手も場数をこなしているのだろう。人の波をスルスルと掻い潜ってゆく。

「やっぱり、正攻法じゃ追いつけないか」

犯人は、グレーの服の上下に前鏝の広い帽子を被っていた。フルーは走りながら、そのグレーを見逃さないよう、首に輪つかしてかけている紐をたぐり寄せた。

その紐のペンダントヘッドは、大きなクリップだった。クリップには手の平サイズに折りたたまれた紙が挟んである。フルーはその紙を慎重にクリップから外すと、何度か折り目を開いて閉じてして、紙のページを送っている。

それは地図だった。それもただの地図ではない、アルデウイナ市内を網羅した特大地図で、地図上に無数の書き込みがしてある。フルーは、犯人を見失わないよう地図

と道を交互に確認する。

「この先は……倉庫街の入り口だから、次の角を右に行つて……二個目を……よしっ！」

フルーは見当が付いたのか、地図をクリップに戻すと、服の中に押し込んだ。そして、犯人は数メートル先の大通りにいるというのに、大通りの横に口を開けている裏路地に足を向ける。これでは見失つてしまう。しかしフルーは、走るスピードを緩めない。反対に表通りに比べて人通りが少ない分、走るスピードを上げ裏路地を疾走する。裏通りは、路面が平らではなく少々走りにくいが、両足でパズルを組むかのように石畳の上を走りぬけた。

角を二回曲がったところで、一軒の建物が道を塞ぐ。その建物の扉は重石が置かれ勝手に閉まらないようになっていた。フルーは躊躇なくその扉を潜った。

「すいません！ ちょっと通り抜けさせてください」

中に入るとそこは倉庫だった。船から荷揚げされた荷物を一時保管する場所で人足達が、荷車を押している。

「おう！ どうしたんだ？」



フルーの姿をみて何人かが声をかけてくれる。しかし今はそれどころではない。手を振り笑顔でかわす。

「ごめん、いま取り込んでて！」

「そうか頑張れよ」

「またね！」

応援を浴び、一足飛びに倉庫内を駆け抜ける。そして倉庫の反対側の出口へ通りぬけると、なんとそこは元いた大通りだった。

「はい、そこまで！」

ちょうどフルーが大通りに飛び出ると、ヒツタクリの犯人が倉庫の前を通過するところだった。フルーは犯人の前に踊り出ると、相手が驚いた隙をついて、老婆の荷物を取り上げた。

「これは、返してもらおうよ」

「何しやがる！」

「それはこっちの台詞だよ！ これは君のじゃない」  
「返せ！」

「駄目だ」

犯人は戦利品を取り返そうとしたが、フルーは荷物を頭上まで持ち上げる。フルーは男性にしては、背が低い方だが、この犯人はそのフルーよりも更に小柄で、荷物に手が届かない。この身長からするに、ひったくり犯は年端もいかない子供のようだ。

「くそっ！」

小柄な泥棒は、帽子の隙間から悔しそうにこちらを睨んでいる。そして突然フルーの脛を思いつき蹴った。

「いたっ！」

見事にヒット。フルーは痛みに飛び上がる。その隙に犯人はフルーの前より逃走を図った。せつかくの獲物を前に逃走するのは癪だが、捕まるよりはマシと考えたのだらう。

「バーカ！ 詰めが甘いんだよ！」

ヒタタクリ犯は、痛みに苦しむフルーに捨て台詞を吐いて、立ち去ろうとした——  
しかし……。

「それはどうかしら」

犯人は何者かに逃走を妨げられ、地面に背中から倒れる。

「うがっ」

誰かが走り出した犯人の襟首を背後から思いっきり掴んだのだ。犯人は自分の服の襟で首を締められる形になった。舌を噛んでいなければいいが……

——うわあ。あれは痛い。

泥棒は、よほど苦しかったのか自分の首を押さえてもがいている。

「逃がさないわよ」

犯人の襟首を掴んで得意げに佇んでいるのは、ダニエルⅡフィノだった。

「ダニエル！」

フルーは、自分の脛をさすりながら、犯人を取り押さえているダニエルに近づく。「フルー、油断しちゃだめよ」

どうやら彼女もこの泥棒を追いかけて来たようだ。肩で息をして頬を紅潮させている。

今日のダニエルは、長い茶色の髪をアップにしており、彼女定番のスーツに身を包んでいる。スーツといっても男性の物と違い、綺麗なベージュ色の生地を使ったキュ

ロットスカートと同色のベストジャケットを合わせている。パンツでも、スカートでもない、敢えてキュロットスカートを選んでいるのは、仕事着に機能性と彼女なりのファッション性を求めている事であろう。泥棒はそんなダニエルから逃れようと暴れる。

「君、足が速いわね。スリなんてやめて、ちゃんと仕事したら？」

「うるせえ！ 離せ！」

「よかったら仕事紹介してあげるわよ」

「そんな事言つて、人買いかどこかに売つ払う気だろ！」

「あら、失礼ね。それでも私、一応役所の秘書官よ」

泥棒は更に暴れる。暴れるあまり被っていたグレーの帽子が地面に落ちた。お陰で帽子の中に隠れていた顔と髪が露になる。

「あれ、きみ女の子だったの？」

帽子の中から現れたのは、まだ幼さの残る可愛らしい少女だった。フルーは、泥棒少女の前にはやがみ顔を覗き込む。

年の頃は、十二、三歳くらいだろうか。肩までのまつすぐな金髪に碧眼とお人形のように可愛らしい顔をしていた。しかし、その可愛い顔は目の前のフルーに噛み付か

んばかりの威嚇をしている。

「噛みつかれそうだ」

「あら、フルーに負けず劣らず可愛い子！」

ダニエルの言葉の語尾にハートマークが見える気がした。ダニエルは可愛いものが大好きだった。

「……ダニエル、一言余計！」

フルーはダニエルに突っ込みを入れるのを忘れない。フルーはその容姿から頻繁に女性に間違われる。本人も自覚しているが、面と向かって指摘されると多少は傷つくらしく、頬を膨らませ不貞腐れている。

「ごめんごめん、フルーちよつとこの子代わりに抑えておいてもらえるかしら」

「う、うん」

フルーはダニエルに代わり、泥棒少女の腕を取る。

ダニエルは、その隙に自分のジャケット内ポケットから革製のカード入れを取り出し、そこから一枚のカードを取り出した。

「はい、これ私の名刺。あげるわ」

ダニエルは自分の名刺を泥棒少女に差し出した。しかし少女はそっぽを向いて受け取る気配がない。仕方ないのでダニエルは少女のシャツのポケットにカードを差し入れる。

「貴女、こんな事を続けても先はないと分かっているでしょ。困ったらいつでも訪ねていらっしやい。頼りないかもしれないけど、協力するわ」

ダニエルは役所に勤めているが、彼女の実家のフィノ家はアルデウイナでは古参の名家だ。ダニエルはこう見えて結構なお嬢様なのだ。しかし彼女はその事で驕るような事はない。誰にでも同じ目線で話をし、対等な関係を築こうとする。記憶喪失でいまだに身元が判明していないフルーに対して、分け隔てることなく接してくれている。ダニエルはとても尊敬出来る女性だ。

「フルー離してあげていいわよ」

「いいの？」

「ええ」

フルーは少女の腕を離した。腕を離すと同時に少女は一目散に雑踏の中に走り去って行った。二人はその後ろ姿を見送った。

「訪ねてきてくれるといいね」

「期待しないで待つわ」

\* \* \*

「ダニエル！ さつきわざと訂正しなかつただろ！」

フルーとダニエルは、ロクサーヌの食堂にいた。

二人は何やら大きな声で話している。昼をとくに過ぎた食堂は人が疎らだ。そのせいもあり二人は少し悪目立ちしている。

「二人共、どうしたんだい？」

注文を席に取りにきたロクサーヌは、怪訝な顔をしながら二人に呼びかける。

「聞いてよロクサーヌおばちゃん！ さつき商業地区でフルーがひったくりを捕まえたのよ」

「それはお手柄だったねフルーちゃん！ やるじゃないか」

「いや、それほどでも。たまたま上手くいっただけだから」

フルーは、ロクサーヌに褒められ頭を掻きながら謙遜してみせる。

「でねっ！ 丁度わたしもその場に居合わせて、二人で奪い返した荷物を被害者のおばあさんに返しに行ったの」

ダニエルは立ち上がりそのときの様子を実演してみせる。少々それは大げさで芝居染みている。フルーはとうとうと、それを面白くないと言いたげに、唇を尖らせてダニエルの様子を見ている。

「荷物を盗まれたおばあさんが私たちを見て……『ありがとうよ！お嬢ちゃん達！お陰で助かったよ！』て言ったの」

ダニエルはその時の事を思い出したのか、近くのテーブルの面を叩きながら笑い出す。

「わ、私はいいとしてね……ねえ？ フルーまで女の子に間違つて！」

ダニエルは笑いすぎて腹が苦しいのか、体をくの字にして腹部を両手で押さえている。

「ダニエルのいじわる」

本日のフルーの服装は、白のレギュラーシャツにグレーのベスト、深緑色のズボン



に膝下丈の茶色のブーツだ。決して女性らしい服装ではないのだが、生来の女顔に低めの身長、そしてこの半年の間で肩甲骨辺りまで伸びた金髪が彼を女性のように見せている。

「なんだ、それでフルーちゃん膨れていたのかい」

フルーとダニエルは、盗まれた荷物を手に老婆の元に戻った。二人の姿を見た老婆は大喜び。二人にお礼をと市場で仕入れたばかりの林檎を一箱くれた。最初は断ったが、半ば強引に押し切られてしまった。

それにしても老婆は最後まで、フルーのことを女性だと疑っていなかった。

「ダニエルそれくらいにしておやりよ。フルーちゃんのおへそが明後日の方角に曲がってしまうよ」

「ごめんごめん、あまりにも面白かったから……」

フルーをちらりと見やる。そしてまた笑いが込み上げそうになるのを必死で堪えている。

「こつちだつて好きで間違えられているわけじゃないんだからね」

「ごめんでば！ それで話は変わるんだけど、ロクサーヌおばちゃん、この大量にあ

る林檎もらつてくれないかな？ さすがにこれだけの量を家に持つて帰つても食べきれないと思うのよ」

ダニエルは二人で苦勞して運んできた林檎の山を指差してロクサーヌに懇願した。フルーもロクサーヌを見て何度も頷いている。

「いいのかい？ せっかく二人がお礼にもらつたのに」

「是非ともお願いします！」

フルーはロクサーヌの両手を握ると強く願ひ出る。こちらはダニエルより少し切羽詰つているといふか必死である。

「この林檎達、僕なんかよりロクサーヌの魔法の手で、美味しいものに変えてもらつた方が幸せだと思ふんだ。僕達を助けると思つてお願いします」

「フルーちゃん、よしてくれよお恥ずかしいよ」

なぜフルーがここまで必死なのかというと、彼は料理が得意ではなかつた。朝御飯程度の物は何とか作れるが、林檎は剥いて食べる以上の料理センスがない。これだけの林檎を剥いて食べたなら何日分あるだろう。

「……同じく」

ダニエルもそつと手を上げる。彼女もそんなに料理が得意なわけではなかった。

「……まあ、こっちはこんな質のいい林檎をもらえて嬉しいけど。そうだ二人とも何か食べたい林檎料理はあるかい？ お礼にご馳走しようじゃないかい」

「本当！ じゃあアップルパイかしら、でもコンポートとタルトも捨てがたい」

ダニエルは赤い林檎を眺めながら真剣に考えている。女性は甘い物に目がないというが、フルーも甘いものが嫌いではなかった。ロクサーヌが作るお菓子も美味しいが、街の露店などで売る小麦の薄皮にクリームやフルーツを入れたりするおやつや、ケーキも大好きだった。懐に余裕がある時はよく買う。

「それは時間が掛かりそうだから、次に来たときにね。フルーちゃんそのときはローレンとドクターも連れておいで」

「うん、分かったロクサーヌ」

「よし今日は……そうだね焼き林檎を作ってきてあげようかね。それにしても、ずいぶん立派な林檎なこと。そのおばあさんの荷物、余程大切な物が入っていたんだね」

ロクサーヌは、林檎の山から形のよさそうな林檎を手にする。林檎は赤く艶やかで痛みがない。普段フルーが買う林檎とは大きさも香りも違う一級品だ。いったい全部

で幾らくらいするものだろうか。考えると怖くなりそうだ。

「あの荷物。相当大金が入っていたのかしらね」

ダニエルは、テーブルに置いてあるメニューを手に取ると、暢気に焼き林檎に合うオーダーを考えている。

「どうしようかな。焼き林檎に合いそうなミントティーと、バニラのアイスクリームオーダーしようかしら。フルーは何にする？」

「僕はコーヒード」

「えっ、今日は驕ってあげるつもりだから、遠慮しないでよ」

「なんで、悪いからいいよ」

ダニエルはいいわよと言うとフルーに自分が持っていたメニューを押し付けた。

「実はフルーにちよつと聞きたいこととかあるのよね」

「聞きたいこと？」

フルーは、メニューを受け取りながら少々嫌な予感を感じた。ダニエルはテーブルに両肘をつけてこちらをニコニコと眺めている。

「ねっ、だからご遠慮なく」

——なんだろう、この嫌な予感。

程なくしてテーブルの上に、ロクサーヌ特製の焼き林檎とバナラアイスがトッピン  
グされた豪華な皿とお茶のセットが用意された。フルーはダニエルと同じものを注文  
した。

「おおー！」

それはキラキラしていて宝石のように綺麗だった。林檎からは熱々の甘い湯気が上  
がり、スパイスのシナモンが鼻をくすぐる。林檎の横に添えてあるバナラアイスが溶  
けて皿の上で渦巻きのように広がる。

「さ、アイスが溶けないうちにいただきましよう」

ダニエルは満面の笑みで、林檎とアイスを絶妙配分で掬い上げると、こぼさないよ  
うスプーンを口に誘い入れる。

「んー！ おいひい。やっぱり仕事の疲れには甘いものよね」

「やっぱりロクサーヌは魔法が使えるとしか思えない。どうしたらこんな美味しいも  
の作れるんだろう」

「そうね。……ところでフルーこの街にはだいぶ慣れた？」

「まあ。そこそこかな」

フルーは、テーブルにスプーンを置くと、首に下げていた地図を取り出すとテーブルの上に置いた。この地図は全て広げると新聞ぐらいのサイズになる。

「まだ八割ぐらいだけど、だいぶ回ったよ」

「それ、この半年で？」

フルーがこの街に来てから約半年が過ぎようとしている。フルーがクロードの家に運び込まれたのは、ダニエル祖父ヴィクトルの葬儀の日だった。そのためダニエルは嫌でも日数が分かってしまう。

「クロードの仕事を手伝っているといろいろな場所に行かされるから、自然と人と場所を覚えられるよ」

アルデウイナは人の出入りが激しいので、正確な人口数は不明だが、常に十万人前後の人が滞在している。それは小規模な国家の人口に匹敵する。フルーがその八割を回って、人と接しているというのなら、本当に凄いいことだ。

それは彼、フルーの特技であった。当初街の人々は、記憶がなく正体不明のフルー

の事を奇異な存在として遠ざけていた。最初からフルーの存在を邪険にしなかったのは、彼を見つけたダニエルとドクター、そしてこの食堂の女将ロクサーヌくらいだった。

しかし彼の屈託ない性格と人好きされる性質も相まって、街に溶け込むのに時間は掛からなかった。誰にでも好かれる体質と言うのだろうか、本人は自然とそれをやっている。このフルーという名になった少年は、人の保護欲を駆り立てるのだ。

「フルーは今日どうして商業地区に居たの？」

「クロードの仕事が仕上がったから、代わりに届けに行ってたんだよ」

「どんな仕事？」

「魔導器の説明書の翻訳だよ。最近商業地区の工場が共同で新しい大型魔導器を手に入れたんだけど。説明書が全編魔族の言葉で、クロードに翻訳頼んできたんだ」

魔導器とは、魔族界で作られた機械の事だ。大きさ用途は様々だが、魔導器の最大の特徴は魔力がない人間でも使用できることだ。魔族界との交流がない今、中古品などが市場に流通はしている。中古品でも手入れをしてやれば十分に使える便利な機械だ。ただ1つだけ難点なのが、魔導器の取扱説明書が魔族言語で書かれており、正し

い手順で作動させなければ使用できないのだ。普通ならば翻訳書も添付されているのだが、今回の品は、翻訳書未添付の訳あり破格商品だったらしい。

「ふーん、それくらいならクロードには朝飯前ね」

「それが、結構時間掛かっちゃって、魔族の言葉でも古い時代の用語が使われていたみたいで、翻訳に時間取られて結局清書は僕が代筆したんだ」

「あら、フルーの字なら下手な役所の事務方より綺麗だから問題ないと思うけど」

「書くのは嫌いじゃないからいいんだけど、普段見慣れない単語ばかりの文章だったから、何度も書き間違えて心折れそうだった」

フルーはクロードの家で居候をするにあたり、『働かざる者食うべからず』というクロードの方針から、手始めに家の雑用をすることになった。当初は家の掃除や洗濯をしていたが、試しにクロードが自分の仕事の一部をやらせてみたところ、読み書き計算など人並み、いやそれ以上に出来る事が分かった。そして足の怪我がよくなり、リハビリに身体を動かしはじめたところ、その可愛らしい外見とは裏腹に俊敏に動けるので、周囲を驚かせた。しかし、フルー本人が一番驚いていたようだ。

「フルー、ローレンからちゃんとお給料貰っているの？」



「困らない程度に貰っているよ。まあクロードには衣食住世話してもらっている身だから、あんまり贅沢は言えないよ」

「最近のフルーは、やっている事と対価が合っていない気がするわ」

「そうかな？」

「なんでローレンは、そんなにフルーに仕事押し付けているわけ？」

「……それは」

「それは？」

「最近、受けている仕事が入手く進んでいないみたいなんだよね。前倒しで手を付けているみたいなんだけど、どうしても時間が足りなくなるみたい」

「そっか……」

「もしかしてダニエル、僕に聞きたい事って？」

「そう、ローレンの手の空き具合が知りたくて、実は早急に手を借りたい仕事があったね……」

ダニエルはそういわずとと大事そうに持ち歩いていた革鞆を叩いた。

クロードの仕事は、本人は『何でも屋』と言っているが、大きく分けて二通りある。

一つはダニエルなど役所からの指名依頼。こちらは役所から『特務官』という官職の権限が与えられる。彼の特性を活かして街の運営維持に関わる仕事を引き受ける。もう一つは一般の人から直接依頼されるもの。先ほどの魔導器の翻訳文作成のようなものだ。クロードは役所に役籍を置いているため、役所仕事が優先されるのだが、人間領に住む変わり者魔族は、多方面で人気があり、依頼は常に満員御礼の立て札を掲げたいほど溢れている。そのため同時並行でいくつもの仕事を抱えているのが通常だ。だが時々厄介な仕事にぶち当たり煮詰まり、停滞する。現在、そのとばっちりを受けているのが助手をしているフルーというわけだ。

「……困ったわ」

ダニエルはミントの香りのするお茶を傾けながら呟く。

「ダニエル、そう思うならうちの貴重な戦力を返してもらえないか」

ダニエルとフルーは同時に飛び上がる。素早く背後を振り向くと、いつ来たのだろうか、ダニエルとフルーの背後にはクロードが腕組み仏頂面のコンボで佇んでいた。

「び、びっくりさせないでよローレン！」

毎回思うのだが、クロードの登場は心臓に悪い。

「二人共、こんなところで油を売って何をしている」

「何って、女子会よ」

「へえっ！」

——じよ、女子会って！

フルーはダニエルの冗談に目を白黒させるが、クロードはダニエルの冗談にもしれつとした表情で受け流す。

「はいはい、また甘いものばかり食べていると、鼻の頭のそばかすが増えるぞ」

クロードはそういうと、ダニエルの鼻柱を指ではじく。

「もう大きなお世話！ 人が気にしている事を！」

ダニエルは鞆からコンパクトを取り出すと、これ見よがしに鼻頭のそばかすに粉を叩く。傍から見ると二人のやり取りは面白い。フルーは思わず笑ってしまった。

「ダニエル、なんで気にしているの。そのそばかすとっても可愛いのに勿体無いよ」

フルーは自分の思っていることを素直に述べた。ダニエルの鼻の頭から頬には、そばかすがある。白い肌に点々とあるシミはチャーミングだと思っていたのが、どうやら本人は気にしていられない。

「もうフルーたら！ 嫁にもらいたくなるような事言わないでよ！」

ダニエルは照れ隠しに、フルーの背中をバンバンと平手で叩く。

「ちよつとダニエル！ それは僕のこと褒めているの、それとも貶しているのかな？」  
「いやだ。褒めているに決まっているじゃない。それよりローレン、フルーの待遇少し考えたら、最近ずいぶん重宝しているみたいだけど、正式に仕事の助手として役所の役籍を申請してみたらどうなの」

「ダニエル何を唐突に！ 僕に役籍だなんて身分不相応だよ」

役所の役籍とは、アルデウイナの運営に関わる役所関係者に与えられる特別な『籍』だ。役籍を持つば同時に街の戸籍を持った住民として正式登録される。アルデウイナの戸籍を得るには大変厳しい審査があると聞く、しかしそれが通れば身分の保証はもちろん、様々な行政サービスなど恩恵を受けられる。フルーはその戸籍さえ取得していない。なのに役所に役籍を得るなど、一足飛びすぎると言いたいのだ。

「そうだな、実は考えていないわけではないんだが、特務官の補佐の席となると、押しになる実績がないと難しいだろう」

「なるほど実績ね。それは言えているわ」

「チャンスがあるとき申請してみるさ」

「その時は任せて。裏書に推薦人が欲しければ数人集めてくるわよ」  
ダニエルはそう言うとう自分の腕をパンと叩いて見せた。

「ああ、そのときは頼む」

「ちよつと、二人共僕を置いて話を進めないでもらえますか」

フルーは、自分を他所に話が進んでいるので、抗議の声を上げるが。

「悪い話じゃないからいいじゃない」

ダニエルは、笑いながら椅子の下に置いておいた革靴を取り上げる。

「丁度ローレンが来たからここで話しをしまつていいわよね」

ダニエルは是が非でもクロードに仕事を依頼するようだ。クロードは、ダニエルの性格を知ってか、諦めて食堂の空いている席に着く。

ダニエルは、鞆から書類の入った封筒を取り出し、中身をクロードの前に差し出した。

「これはどうしてもローレンに引き受けてほしいの」

クロードはダニエルから書類を受け取ると、ページをめくりはじめた。数枚めくつ

たところで、クロードの目つきが変わった。いつもの不機嫌そうな顔に鋭さが加わる。クロードは、フルーに書類を渡す。どうやらお前も目を通せと言う意味のようだ。フルーは受け取ってページをめくる。

「これは本当か？」

「ええ、確かよ。ここ数週間商業地区で人攫いが横行しているの。それも若い器量の良い女性ばかりを狙ってね」

フルーが受け取った書類には、行方を絶った女性の名前、最後に目撃された場所、被害届などの情報が記されている。

「……それで今日、ダニエルは商業地区に？」

ダニエルは、頷いてみせた。

「今日は現場状況の確認と諸々の仕込みをしにね。背後に大規模な人身売買組織がいる可能性があるわ。あとフルーの身元の手がかりがあればと思ったのだけど、今回は女性ばかりの人攫いみたいだから」

ダニエルはこの手の話は必ずクロードに持ってくる。それはフルーの身元の手がかりになればという彼女なりの気配りだ。

「ダニエル、いつも気にかけてくれてありがとう」

「お役に立てなくてごめんね」

フルーは本当に頭が下がる思いだった。こんなに親切にしてもらえて、自分は何を返せばいいのと思ってしまう。

「それでその組織をみつけるのか？」

「攫われた女性達の保護が最優先、組織の構成メンバー捕獲なら上等といった感じ」

「これは、また数日下手すると一月単位の仕事だな」  
「だから様子見に来たじゃない。持っている仕事を早急に片付けて手を空けてください」

ダニエルはクロードに簡単に注文をした。クロードはというと整った顔の眉間に深い皺を寄せて険しい表情をしている。それはそうだ、残っている仕事を片付けるとなると今夜は徹夜になるだろう。

「魔族使いの荒い人間め。フルーお前も手伝えよ」

「……やっぱり」

恨み節の一つも言いたくなるが、酷い目に合っている女性達のため頑張るしかない。

4 ギターとピアノ

\*

フルーは酒場にいた。

商業地区にあるその酒場は、日が暮れる少し前に開店する。ここは港で働いていた船乗り、人足、異国の商人など様々な人々が集まる社交場だ。

言葉が通じない者も多い中、酒と店内に流れる音楽が彼らの一日の疲れを癒してくれる。少ないつまみを肴に酒を豪快に飲む。ここはそういう場所だ。

「フルーちゃん、次は三番テーブルにこれ持って行って」

「はい」

フルーは、厨房から上がってきた料理の皿とビールのジョッキを受け取ると、気合を入れてそれら全てを持ち上げる。

「おまたせしました。ビール四つに、本日のおススメ、イカのからっとリング揚げです」



言葉の語尾を上げて笑顔で注文の品を読み上げる。そして素早くテーブルに料理を並べると再び笑顔のサービス。

「以上で、ご注文はお揃いですか？」

「ああ、ありがとうございます」

「ごゆっくりどうぞ」

お盆を両手で抱えると、挨拶をして引き上げる。

本日のフルーの出で立ち前は、白のブラウス、水色のジャンパースカート、そして酒場から支給されたフリル付きのエプロンだ。少々癖のある金色の髪は、いつもならば適当に括っているのだが、今日は複雑な編み込みに結い上げられており、髪の端には空色のリボンが飾られている。そして頬にはチークが載せられ、唇にはピンクのルージュが引かれている。つまり彼は、酒場でウェイトリーや、女装をしてウェイトレスとして働いている。

「フルちゃん、こつちも注文頼む」

「はい、伺います！」

呼ばれた方に手を振る。室内は他のウェイトレス達も忙しそうに動き回っているの

で、料理にぶつからないよう、気をつけながら小走りでフロアを移動するのだ。

「お待たせしました。ご注文伺います」

フルーはエプロンのポケットから伝票と鉛筆を取り出し、これでもかと笑顔を振りまく。その徹底した女装と眩い笑顔のお陰で、彼女は気づけば船乗り達のアイドルになっていた。

——なぜこうなった！

フルーは笑顔の裏で、特大の疑問符を打ち立てていた。

それは、話せば長くなる。話は丁度一週間前に遡る。

ダニエルⅡフィノがクロードに持ってきた仕事はすべての事のはじまりだった。

ダニエルの話と書類の報告書では、ここ数週間、商業地区で器量の良い女性が忽然と姿を消すという事件が頻発しているようだ。

その被害者数は届けがあるだけで既に十人を軽く越しており、商業地区の世話役から役所に助けを求める訴えがあった。まず被害者家族に事情を聞いてみたところ。誘拐ではない事が分かった。誘拐ならば身代金の要求があるはずだが、そういった連絡

は無いそうだ。そして被害者の家は、決して裕福といえるものではなく、日々の生活を慎ましやかに送っている家族ばかりだった。そうなると誘拐の線は消える。

家出や駆け落ちなどの可能性も視野に入れたがその線も薄い。通り魔などの事件に巻き込まれたのであれば、死体が上つてもいい。目撃情報さえない。

そうなると残りは一つ、人身売買を目的とした人攫いだ。そうなれば早急に手を打たなければ、攫われた女達の末路は火を見るより明らかだ。外見を重視して集めているとなると、女性が体を売る花町や金持ちの愛好者辺りに売り飛ばされるのが関の山。国外に出されてしまつてはもう助け出すことは出来ないだろう。

ダニエルは同じ女性として、そんな事は許されないと憤慨した。そしてある提案を打ち立てた。

「虎穴に入らざんば虎子を得ず。今回は私が囷になって、人身売買の組織をおびき出す」と思うの」

何を言ひ出すと思えば、既に商業地区で段取りをつけてきたといのだ。

「ダニエル、何を言っている！」

クロードがテーブルを打ち叩く。

「何よ。私の容姿じゃ、誘き寄せられないとか言いたいのか？ 私だって少し綺麗に着飾れば……」

「違う！ 俺が言いたいのは、ダニエルお前の身に万が一何かあってみろ！」

「大丈夫よ、そのためにローレンにこの仕事依頼しているんじゃない。ボディーガードをお願ひします」

クロードの特技は机上で行われる仕事だけではなかった。クロード宅の一階リビングの暖炉の裏には、一振りの剣が置かれている。その剣は大振の両刃剣だった。柄を入れるとかなりの重量があり、フルーは試しに持たせてもらったが、両手で持ち上げるのがやっとだった。

クロードは、その重い剣をまるで鳥の羽を振るうかのように軽々と取り上げ、戦慄が走るような太刀筋を繰り出すことが出来る。この剣一本で街道の夜盗や犯罪者を一人で蹴散らす姿は、街では有名らしい。

この魔族は、何でもそつなくこなすので、欠点を見つけないのが難しい。

「でもダニエル、いくらクロードが守るとはいえ、僕も大切な友達に何かあったらと思うと生きた心地しないよ」

「絶対駄目だ！ この案は呑めない。もしダニエル、お前に何かあってみる、俺は死んだヴィクトルに顔向けが出来ない」

クロードは、ダニエルの祖父の名前を持ち出した。ダニエルもその名前を持ち出されると弱い。ダニエルはしばらく何かを考えているのか押し黙ると、ゆっくり会話を再開させる。

「ローレン、ズルいわ。お祖父ちゃんの名前を出すなんて……じゃあ、どうすればいいのよ！ あんな人が多い場所で、囿を出さないで一味を探せると思うの？」

「それは、だな……」

ダニエルの言うことも分からなくはない。

「他に誰か囿をやってくれるというなら、私も裏方に回るわ、でも適役がないのよ！ 私は役所の女性陣に、危険だと分かっている事をやって欲しいとは頼めないわ」

ダニエルは、本当に心根が優しい。彼女の地位ならば、部下に命令する事も出来る。上に立つ者は、時に冷徹に判断をくださなくてはいけない。しかし、それがまだ出来ないダニエルは、自分の身を差し出す選択をした。

クロードはテーブルに肘をついて、険しい表情でしばらく何かを考えている。

「ダニエル、囹の条件要項は何だ？」

「そうね、今まで姿を消した女性の共通点は、十代の若い子、器量が良くて、容姿が整っている子だから、外見は重要ね。あとは作戦を理解してくれて、犯人が接触してきて、警備隊が駆けつける間、自分の身を守れば合格かしら」

「なるほど、人目を引くような容姿で、それでいて何かあったとき、最低限自分の身を守ればいいのか？」

クロードは、しばらくダニエルに視線を固定していたが、ふいとフルーの方を見る。「いるだろう適役が」

ダニエルは、最初クロードの言葉の意味がよく分からないという顔をしていたが、突然椅子から立ち上がった。

「……あつ！」

そして人差し指で宙を指す。その指の先にいるのはフルールだ。

「……ダニエル、何？」

「居たあ！」

「外見は、まあご覧の通り。いざとなれば脱兎のごとく逃げられる脚力もある」

「はい？」

フルーは、話の趣旨が分からなかつた。ただ二人から注がれる期待に満ちた視線が、これから言われるであろう事を予測した。

「……もしかして僕？ ……えっ冗談だよね？」

「ローレン、体形を隠せる服と……あとは多少メイクを施せばいいかしら。やり過ぎるのもどうかと思うのよね」

「悪いが、その辺りは任せる」

「……そうね、やっぱり丸みは欲しいわよね。そこはパットを入れて、スカートは、清楚な丈の方が男性受けいいのかしら……それから」

ダニエルは、フルーを真剣に見つめ、何か恐ろしい呪文のような独り言を口にして  
いる。

「本気なの！ 僕、こう見えても男だよ？」

フルーはそれから後の記憶がすぐく曖昧だ。その後、ダニエルとなぜかロクサーヌまで加わって、女性物の服を用立てて来た。フルーは、二人に着せ替え人形のように、次々と女性用の衣装を着せられた。その度に、女性陣の歓声上がる。装飾品は、ク

ロードが自分の持ち物から女性用にも使えそうなものを選んできた。

フルーの意識は、完全にどこかに飛んでいた。

今思えば、ダニエルがお茶をおごると言った辺りから嫌な予感がしていたが、まさか女装をさせられる事になるなんて夢にも思わなかった。

「フルー可愛い！ これなら絶対大丈夫よ」

無事メイクが終わると、ダニエルは姿見を運んできた。

フルーは、恐る恐る覗き込んだ姿見に写る自分の姿に絶句した。

自分では認めたくないと思っていたが、鏡の前には完璧な美少女が立っている。フルーは鏡の前で手を動かしてみた。手はきちんと付いてくる。これは紛れもない自分自身だ。フルーは乾いた笑いをあげる。

「か、完璧だね……」

酒場は、ダニエルの知り合いのオーナーが経営しており、事前に話を通してあったため、フルーはすんなり酒場のウェイトレスとして入り込めた。

入り込んだのはいいが、この一週間本気でウェイトレスの仕事をさせられている。ビ



ールのジョッキ5つを同時に運ぶのは力とコツがいる。そして慣れないパンプスは、毎日足が拷問を受けているようだった。女性はよくこんなものを履いて歩いていると尊敬せずにいられない。

「おねえーちゃん、今日もかわいいな」

料理で両手がふさがっていたフルーの尻を船乗り達が撫でてくる。それはもはや恒例行事となっている。

「……きやつ、もう止めてよ！ 落としたらどうするの！」

フルーは、女性らしく男性客に抗議をする。

——あまり深く考えるのはやめよう。

フルーは自分に言い聞かせていた。

今は、酒場のピークの時間帯だ。上手く切り盛りすることだけ考えよう。多くの事を考えると、頭がパンクしてしまいそうなので、目の前の事だけ考えることにした。

「女の子達、今日は歌か踊りはやらないの？」

来ましたお客の無茶振り。酒場には小さな舞台がある。その横にピアノやギターなどが並んでおり、ちよつとしたショーが出来るようになっていた。たまに流しの歌手

や踊り手さん達が披露するが、毎日というわけではない。

今は、ピアノ弾きとギターが室内に楽しげな音楽を奏でている。

こういう日はウエイトレスの女の子達が何か出し物をする。フルーは新人なのを理由にこの要求から巧みに逃げていた。しかし今日は同僚のウエイトレスに腕を捕まれ舞台上引つ張り出された。

「あなたももう踊れるわよね？」

「無理、無理、無理！」

フルーは抵抗するが、同僚達の波に巻き込まれ、舞台中央に押し出される。

——配膳ならまだしも、踊りとか本当に無理ですから！

ここまで抵抗するのには、訳があつた。フルーは歌を唄ったり踊りを踊った事が無い。正確には、その記憶がない。

現在までで歌と踊りに関する記憶は、アルデウイナの夏のカーニバルで踊り手さん達が踊っていたのは見たのと、近所の小さな酒場で酔っ払い達が歌うのを眺めていた程度の記憶しかない。経験値が圧倒的に足りないのだ。

「おーい。女の子達が踊ってくれるらしいぞ！」

男達の口笛と歓声が酒場の中に響き渡る。

「景気良いのを一曲頼む」

室内の音楽がガラリと変わる。音楽の事はよく分からないが、ピアノのテンポが変わり聞き鳴れたメロディーが流れ始めた。

——あ、この曲。

たまにクロードやドクターに連れ出されて訪れる酒場でよく弾かれている曲だ。題名は知らないが、この曲になるとみんなが踊り出す。きっと有名な曲なのだろう。

酒場に流れる演奏は、ピアノとギターの生演奏だ。そろいのエプロンをつけたウエイトレス達は曲に合わせて、くるとターンをして手を叩く。ヒールの底を打ち鳴らしてステップを踏む。よく見ればあまり難しい事はしていない。「ほら、こっやっって、こっ分かった？」

隣で踊っていた子が見かねて、立ったまま動けないでいるフルーにステップを教える。

フルーはその動きを何度か見てから、意を決したのか、はたまた諦めたのか周囲と同じステップを踏み始める。

女性達は音楽に合わせて輪になって踊る。みんなとても楽しそうだ。実際フルーも少し楽しくなっていた。

クライマックスは音楽が早くなって、ステップも早くなる。そして最後は全員で決めポーズ。

「ありがとうございます！」

室内に拍手と歓声がかかる。

「いいぞー！」

フルーも歓声に答えて手を振る。迂闊にも楽しんでしまった。まあ、普段の自分を知るものが見ていなければ、いいと思った。

舞台から降りたフルーは、カウンターの方に進んだ。

「お疲れさん」

「店長、お疲れ様です」

店長はそう言うと、舞台に出た女性達に、氷の入った水のグラスを配った。汗をかいたのでこれはありがたい。フルーはグラスを受け取ると、口を付け一気に口に運んだ。

「……っこれって！」

グラスの水を飲み干すと、喉の奥が急激に熱くなる。そして顔は火が付いたようにカッカしてくる。フルーが飲んだものは水ではなかったようだ。

「店長、これは何ですか！」

「あれ、フルーちゃんは、ジントニック駄目だった」

隣にいた同僚にグラスの中身を教えられた。舞台上で踊った子は店長からお酒を一杯ご馳走してもらえそうだ。今日はたまたまジントニックだったらしいが。フルーは水と間違えて、グラスの半分以上を飲み干してしまった。しかもこれは、かなりジンの割合が多い。

——ま、まずい

フルーはカウンターの隅にへたり込んだ。

「おいおい、大丈夫か？」

「はい」

実はフルーはお酒に弱かった。少しなら飲めるが、踊って喉が渴いたところに強めのお酒を一気に流し込んだので、酔いが一気に回ってしまった。

——失敗した

脈拍が早くなり、目の前の景色が歪んでみえる。

「そうか、悪い悪い、君は酒に弱かったか、少し裏で休んでくるといいよ」  
「そうしますう」

\* \* \* \*

フルーは店の裏手で酒の酔いを醒ますことにした。

アルデウイナは、もうすぐ夏も終わろうとしている。しかし、日が落ちてもまだまだ昼間の熱気が残っている。地面の石畳が温かい。

おまけに港の周辺は潮風が強いため、肌がべたつく。汗ばんだ体が気持ち悪い。フルーはパンプスを脱ぐと、手近にあった。酒樽の上に腰を下ろした。

そして、スカート裾と両膝を抱え込むと、樽の上に両足を乗せた。パンプスを脱いだつま先からじんわりとした痛みが広がる。フルーは、頑張っている自分の両足を

手で擦ってやる。あまりお行儀の良い恰好ではない。

丁度そこに、先ほど舞台横でギターとピアノを演奏していた二人が休憩に入ったのか、フルーの前を通りかかる。フルーは、慌ててスカートの裾を整えると、樽の上に乗せていた足を地面に下ろした。今の格好は、女性として、ははしたない格好だ。今のフルーの使命は人目がある場所では、女性を演じることだ。

「お疲れ」

「お疲れ様です」

フルーは努めて高い声を出す。

「君、大丈夫？ 顔が真っ赤だよ」

ギターを弾いていた方が声を掛けてきた。青みの強い髪に、愛嬌のある優しい顔付きの青年だった。舞台用の少し派手なジャケットを、嫌味なく着こなしている。フルーの様子をみて、心配をしてくれているようだ。

「はい大丈夫です、少し休んだら復帰します」

「そう、また今日みたいに踊ってね」

「機会がありましたら。いつも演奏素敵です」

フルーは社交辞令的な感想を述べる。

「ありがとう」

そういうと、ギター弾きの方は通り過ぎていった。

続いてピアノを弾いていた黒服、黒メガネの男性が、無言でフルーの前を通り過ぎる。何も言わない彼はフルーの横にある樽の蓋に、何やら一本の瓶を置いた。

よく見るとその瓶のラベルには「水」と書いてある。

なんとフルーに水を分けてくれたのだ。

「あ、ありがとうございます」

フルーは礼を述べるが、ピアノ弾きの青年は何も言わず去っていった。

親切な人もいるものだ。フルーは、水の入ったビンを掴むと樽の上に座り直した。

フルーはあと何日ここで働く事になるのか考えていた。

体を動かすのは嫌いではないが、今まで働いてきた環境と全然違うため、少々疲弊していた。

ダニエルから、ここで働いた給金は貰ってよいと言われていた。どれくらいもらえるのだろうか。今はそのお金の使い道を考えるのが唯一の楽しみだった。



フルーは、いろいろ考えるがコレという物が思い付かなかつた。

ぼんやり空を見上げてみると、東南の空に地上を煌々と照らす丸い月と出会った。

——どおりで明るいと思つた

今日は満月だ。こんな月明かりの明るい晩に人攫いなんて出るのだろうか。

月の前を雲が移動してゆく。フルーは気が付くとその雲を目で追っていた。それはまるで白い紙に黒いインクを零したときの筋のようだ。

「そうだ、万年筆が欲しいな」

フルーはいつも書類を書くとき付けペンを使っている。長い文章を書くときなど、インクを付けたし書くのはとても面倒だった。その点、万年筆はインクが中に内蔵されている。クロードやドクターが持っているのを見て、凄く憧れた。しかし万年筆一本の値段は、フルーの一月分の給金に相当する。とても手が出せるものではない。しかし、万年筆があればインクを零して書類を書き直すこともなくなる。仕事が楽になるし、早く仕上げられる。

「お給料いっぱい貰えるといいな」

蓄えを足して、一番安い物に手が届けばいいのだが。

フルーは、笑いが込み上げてきた。

なぜ今、クロードの助手の仕事などを考えているのだろうか。自分がおかしかった。

——早く帰りたいな

出来る事なら、自分の寢床で寝たい。フルーはこの一週間、この格好のまま昼間は酒場の周辺を歩き回り、夜は酒場で仕事。朝方、酒場の二階の事務所のソファで仮眠を取る生活をしている。

フルーの部屋は、クロードの家の二階にある。元はクロードが納戸として使っていた部屋なのだが、綺麗に片付けて使っている。

部屋は、ベッド、書き物が出来る小さな机と背の低い棚があるだけの殺風景なものだ。しかし、フルーは今その空間が恋しくてたまらなかつた。いつもならばこの時間は、ベッドの背もたれに寄りかかって本を読んでいる。楽しいお話の本を読みながら、眠くなるのを待つのだ。

——駄目駄目、考えるのやめよう。

これではホームシックだ。

フルーは、先ほど貰った水の入った瓶に口を付けようと思った。しかし、それは出

来なかった。突然何かで口を塞がれ、数人の人間の腕がフルーの体を抑える。

「んっ！」

——これは薬品だ。

フルーは抵抗しようとした。だが気が付くのが少し遅かった。薬品を吸い込んでしまい意識が暗闇の中に落ちて行くのが分かった。周囲の音が遠のいてゆく。フルーは意識を失う寸前、心の中でガッツポーズをした。

——よし、かかった！

\* \* \* \*

目が覚めたとき、酷い頭痛に襲われた。

これは気を失う前に飲んだ酒のせいだろうか。それとも嗅がされた薬品のせいだろうか。フルーは、痛む額を押さえたかったが、両手首を背中側に縛り上げられているため、動かすことが出来なかった。

「目が覚めた？」

背中側から声がした。縛られている上、床の上に転がされているため、声がする方を容易に見ることが出来ない。

フルーは頭が痛むのを我慢して、背中で床を這い、勢いを付けて起き上がる。

「……いたたたつ、ここは、どこ？」

この質問は、正しいものだと思えないが、声の方に質問を投げかけてみた。

「どこかの倉庫だよ。お前攫われたんだ」

室内は明かりがなく、唯一の明かりは高窓から差し込む月の光だ。雲が薄らぎ室内が明るくなる。

「君は……」

声を掛けてきた人物の顔が見えた。どこかで見覚えのある碧玉の瞳とまっすぐな金髪がこちらを見ている。

「あつ！泥棒少女！」

そう、目の前にいたのは一週間前フルーが捕まえたひったくりの少女だった。

「お前あのとき邪魔してきた奴かよ！」

少女もフルーの事を覚えていたようだ。あの時とはだいぶ服装が違うが、どうやら

同一人物と認識してくれたようだ。

「ははは……こんな所で会うなんて奇遇だね」

少女は外見に合わない粗悪な口調で話をする。

「ジョゼ、あなたまたまた人様のものに手を出したの！」

少女との会話に新たな人物が加わる。ジョゼと呼ばれた少女の丁度背後に、もう一人女性がいた。

「お姉ちゃん！それは」

「あれほど、駄目だと言ったでしょ」

青い顔をした栗毛色の美人が、倉庫の荷物に寄りかかってこちらを見ていた。肩で息をしているらしく、とても苦しそうだ。

「君、大丈夫？ どこか具合でも」

「お姉ちゃんは体が弱いんだ！ こんなところにいたら病状が悪化するの当たり前前だろう！」

お姉ちゃんということとは、彼女の姉なのか。確かに髪の色以外は良く似た姉妹だ。だが姉の方は妹と違ってとてもお淑やかだ。フルーは周囲を見回すと、十数人の女性

が倉庫に押し込められているのが確認できた。彼女達の目はうつろで、力なく床の上に横たわっている。全員が、希望を閉ざされ絶望に落とされたような表情をしている。フルーはさらに室内の様子を注意深く観察する。室内の環境はかなり劣悪だ。床の上には水と食料らしきものが置いてあるが、それらにはハエが集っている。空気は淀み、鼻を突く異臭がする。こんな環境では、体調も悪くなるのは当たり前だ。

その中でも泥棒少女いや、ジョゼと呼ばれた少女のみ意思の強い瞳を輝かせている。それはきつと姉の存在が大きいのだろう。自分が病弱な姉を守らなければという使命感が彼女を強く輝かせている。

「君の名前、ジョゼでいいのかな？　ちよつとこつちに来てくれないかな」  
「なんだよ」

ジョゼはフルーを怪しい者を見るかのような目で見ている。

「今は、いがみ合っている場合じゃないだろう。協力してくれないかな」

ジョゼはしぶしぶフルーの傍に動きが不自由な体を動かしてくる。

「ありがとう。それで一つ頼みがあるんだけど、あの窓から外を見てくれないかな？」  
窓とは、明り取り用に設けられている高窓のことだ。

「お前馬鹿じゃないのか、あの高さ届くわけないだろう」

「何も一人でと言っているわけじゃないよ、君を僕が担ぐから覗いてきてほしいんだ。身軽な君なら簡単な事だろう？」

「……それなら」

足を縛られていなかったのはラッキーだ。猿ぐつわをされていないのも幸運なのか、しかしそれは大声を出しても外には音が漏れないという事を示す。

フルーは体を振りながら立ち上がる。手を後ろに縛られているので、立ち上がるのに少々体がふらついたが、立ち上がるコツは分かった。

「いいかい、無理はしなくていいよ。窓の外を見てここがどの辺りか確認すればいいから」

「ま、いけるだろう」

フルーは、窓の下に膝を付き踏み台になった。ジョゼは、そんなフルーの背に片足を掛けると、一気によじ登った。両手が縛られ不自由だというのに、絶妙なバランス感覚だ。

「何が見える？」

「……煙突」

「他には」

「んー……工場の煙突が二本並んでいて、あとは建物の屋根と……」

「どの辺りだか分かるかい？」

「たぶんこの風景なら、港に近い第二工場地帯だよ」

「そう言うとジョゼはフルーの肩から飛び降りた。」

「そうか」

「なんでそんな事が知りたいんだ？逃げ出す方法でも考えているのか？」

「ちよつとね……」

「なら、オレも手伝うぞ。お姉ちゃんを一刻も早くここから出したい」

「ありがとう」

フルーは、今の状況から逃げ出す事は残念ながら難しいと考えていた。

部屋をよく観察すると、部屋の広さは十メートル四方の壁で覆われている。床は木製だ。床の音から下には部屋がありそうだ、最低でも高さは二階以上ということになる。



窓の近くに荷物が積み上げられているが、これを使って窓までよじ登ることは可能かもしれないが、窓が小さすぎる。小柄のジョゼでも通り抜けることは難しいだろう。

そして出口は頑丈そうな鉄扉が一つ。フルーはそつと扉に近づくと戸に耳を付けた。外には人の動く気配と金物がぶつかる音がする。武装した見張りが数人いるに違いない。

今は極力危険な事は避けなければいけない、まずは残り時間がどのくらいあるか知りたい。

「ジョゼ、君とお姉さんは何日前にここに連れて来られたの？」

「たぶん四日前だよ」

「他に女の人がいるけど、皆はどうかな？ どこかに連れ出されたりしてない？」

「オレとお姉ちゃんが来たときは、もうずいぶんな人数が押し込められていたよ。まだ誰も外には出されていないよ」

「そうか」

どうやら売られる前に間に合ったようだ。しかしそうなるという女性達を連れ出すか分からない。他国に売り払うなら船が必要だ。これだけの人数を船に乗せるには夜

がいいだろう。今はその夜。ただ今日は満月だ。こんな明るい晩に危険な橋を渡る者はいないと思うが、反対に意表を付くにはいいかもしれない。

それから今はいったい何時なのだろうか、フルーが攫われて目を覚ますまで、どれくらいの時間が経過したのか知りたい。

「あとは時間か……」

「なんだよさつきから質問ばかりしてさ。少し教えろよ」

「いいかいジョゼ、皆をまだぬか喜びをさせたくないから、これから話すことは黙っていてくれるかい？」

「お姉ちゃんにもか？」

「そうだよ。出来ないなら話せない」

フルーはジョゼの瞳をじつとみた。強い光を放つ碧玉の瞳がこちらを見ている。

「わかったよ」

「約束だよ……もうすぐ助けがくる」

「本とっ……」

フルーは大きな声を上げそうになったジョゼに頭突きをする。手が塞がっているの

で、この処置は仕方ない。

「痛てえな何するんだよ！」

「シーッ！ 外の見張りに聞こえたらどうするんだ！」

「わ、悪かったよ」

「いいかい、僕は皆が閉じ込められている場所を探すために、わざと捕まったんだ。囮になったんだ。ここまで理解出来た？」

「それって……つまり？」

「そう、もうすぐ僕が連れ込まれた場所を確認して、武装した警備隊が助けにくる手筈だ」

フルーは商業地区の地図を思い浮かべていた。先ほど自分が居た酒場からジョゼが教えてくれた場所を考えると、少し距離がある。ダニエル達張り込み部隊と警備部隊は酒場近くの一室に身を潜めている。その場所からこちらに付くまで時間が掛かるはずだ。

「じゃあ、オレやお姉ちゃんは助かるのか！」

「上手くいけば全員助かる。それには時間が欲しい」

ダニエル達はフルーが攫われたのに気づいているだろうか。

フルーは一瞬間の中に不安がよぎった。

手筈では二十四時間フルーの周辺を監視していることになっている。ここは皆を信頼して待つしかない。

「わかった、つまり時間稼ぎだな」

ジョゼはそう言うと言を輝かせた。

「あまり派手なことほしないで静かにしていればいいから」

そのときだった。ジョゼの背後から誰かが酷く咳き込んでいる音がする。

「お姉ちゃん！」

ジョゼは立ち上がると姉の近くに寄り添う。

「大丈夫？ お水飲む？」

フルーもジョゼの姉の横に腰を下ろす。

「ジョゼ、お姉さんの名前は？」

「オルガ」

「オルガ体を横にして、背中を向けてごらん」

オルガは咳き込みながら、フルーに背を向ける。フルーは後ろ手からオルガの背中を擦る。手をロープでしぼられているので、上手く擦ってやることも出来ないが、オルガは少しづつ咳が小さくなる。

「……ありがとう……もう、大丈夫」

か細い声で礼を言われる。

ジョゼの姉オルガはジョゼによく似ている。栗色の髪に碧玉の瞳を持つ美人だ。しかしその顔色は悪く土気色をして、額に大量の汗を浮かせている。咳こみ体力を使つたのか目もうつろだ。素人のフルーが見ても病状が重そうなのが分かる。

「ジョゼごめんね」

「謝らないで、私は大丈夫だから」

ジョゼは姉の前では、虚勢を張らないのか少女らしい口調になる。これが彼女本来の姿なのだろう。

「お姉ちゃん、もう少し頑張つて」

ジョゼは姉の胸に額を付けて、甘える。フルーはそんな二人を見ていて、鼻の奥が熱くなる。迂闊にも涙が出そうになってしまった。

——絶対助けるから

しかし自分には、助けが早く来てくれと祈る事しか出来ない。なんてもどかしいんだ。

そんな時だった。部屋に唯一ある鉄の扉が錆びた嫌な音を立てながら開いた。そして数人の男達が室内に大きな音を立てて入ってくるのが見える。

女性達は、体を強張らせ息を殺して男達を通り過ぎるのを待つ。

なんと男達は、フルー達の方まで進んでくると体を横たえているオルガを見下ろした。

「お、この女まだ生きているぞ」

「結構しぶといな」

男達は弱っているオルガに向かい、寄って集って酷い言葉を投げかける。

「お姉ちゃんに近寄るな」

ジョゼは姉と男達の間で体をすべり込ませると、歯をむき出しにして威嚇をする。その姿はまるで夜行性の小動物のようだ。しかしジョゼの体は、男達によって軽々と動かされる。そして、男の一人がオルガの髪を掴み持ち上げる。

オルガは、聞き取れないほど小さな声で悲鳴を上げる。

「お姉ちゃんに触るな！」

ジョゼはその小さな体で、屈強な男達に果敢に食らいつく。

「ガキは引っ込んでろ」

そういうと、一人の男がジョゼのわき腹を蹴り飛ばす。彼女の軽い体は有に数メートル吹っ飛び壁に激突して止まった。

「ジョゼ！ 何をするんだ！」

フルーは急いでジョゼに近寄る。腹を蹴られたジョゼは、胃の中のものを床に吐き出していた。といってここ数日まともに食事をしていない彼女は胃液を吐き戻すことしか出来ない。

「ジョゼ、ゆっくり息をするんだ」

フルーはジョゼの傍に寄り添うことしか出来ない。

「……おねえ……ちや……ん」

ジョゼは綺麗な瞳から涙を流す。それは痛みと悔しさの混ざった涙だ。フルーは弱い女の子に暴力を振るう野蛮人達を睨み付ける。

「あなた達！ 私達は大切な品物でしょ。手を出していいわけ！」

フルーは、自分が出せる一番高い声を出して、女性の振りをする。ここで怒りにまかせてしまい、自分の正体がばれてしまつては、元も子もない。

「なんだよ。だから顔は蹴らないでおいたさ」

そういうと男達は一斉に笑い出す。何がおかしいと言うのだ。

「さあ、お前はこつちに来い」

男達はオルガの腕を掴み引きずり上げる。彼女は抵抗する力も残っていないのか、無抵抗に引きずられている。

「何をするんだ！ 彼女は具合が悪いんだぞ！」

「ああ、知ってるさ。このままにしていたら直に死ぬだろうな」

「だったらどうして！ こんな酷い仕打ちをする！」

「そうだな、死んだら海に捨てるんだ。こんな美人生きているうちに味合わないと勿体ないだろう。なあ？」

男達はお互いの言葉に同意を求め、ニヤニヤと笑いだす。

「滅多に出会えない上玉だよな。楽しませてくれよ」



フルーは、この男達がオルガに何をしようとしているのか、分かってしまった。男達の間で彼女を回す気だ。なんておぞましい所業だ。そんな事したら、彼女は確実に死んでしまう。

「やめろ！」

「なんだよ、俺達は売り物にならない女を有効活用しようってんだ。感謝してもらいたいくらいだよなあ」

「どうせ死ぬんだ。死ぬ前に楽しんだ方がいいさ」

背後からジヨゼの泣き声にならない声が聞こえる。フルーは、時間を稼ぐためだと自分に言い聞かせ、今にも飛び出して行きたい気持ちを必死に抑えていた。だがもう我慢の限界だった。

「その汚い手を離しやがれ！」

フルーは叫ぶと同時に立ち上がり駆け出すとオルガを引きずる男の腕に噛み付き、怯んだ隙に彼女を自分の背にかばった。

——くそつ、もう少し時間を稼ぎたかったのに。

心の中で愚痴を溢したが仕方がない。体が動いてしまったのだから。手は縛られて

自由にならない。でも足は動かせる。

「この女、何しやがる！」

「變わりにお前が相手をするか？」

「いやだね」

それは不味い。この服を脱いだら正体がばれてしまう。もう少しだけ時間を稼がないといけない。

フルーは、口の中が血なまぐさいので、唾を床に吐き捨てる。どうやら男の肉まで噛み切ってしまったらしい。

「こいつ！ 俺の腕を！」

腕を噛まれた男は、怒り狂い腰に下げていた剣を抜いた。

「おい、品物に傷をつけると、ばあさんに怒られるぞ」

「また補充すればいいだろう」

男の目が血走っている。完全に怒らせてしまったみたいだ。フルーは、立ち上がり室内に逃げ場を探す。しかしすぐに男達に退路を塞がれる。

剣を持った男は、フルーとの距離を少しずつつめる。

「悪い子はお仕置きだ」

そういうとフルーに剣が振り下ろされる。フルーは咄嗟の判断で剣の軌道から逃げられた。しかし、剣ばかり気にしていたので、他に意識が向いていなかった。別の男がフルーを捕まえた。

「……っ」

男はフルーの首を捕まえ締め上げた。そしてそのまま天井の方へ持ち上げる。フルーの足が床から離れ宙吊りにされる、これでは息が出来ない。フルーは必死に足を動かすが、空を搔くだけで床には届かない。

「死に掛けている方より、こっちの方が活きがいい。お前俺の女にならないか、良くしてやるぞ」

目線が同じ高さになった男は、フルーの顔に自分の顔を擦り寄せさせてくる。

——誰が！

「……き、気色……悪いんだよ！」

フルーは、握られている喉から声を絞り出した。ありつたけの力で体を揺らし反動をつけて男の腹を力いっぱい蹴りつけた。

「うあっ！」

運よくフルーの踵は男の鳩尾に入ったようで、男は苦痛に顔をゆがませフルーの首から手を離れた。フルーの体は宙に放り出される。

咄嗟に受身と取ろうとしたが、両手を縛られた無理な体勢からの受身は、体術の経験がないフルーには無理な事だった。フルーは左肩から床の上に落ちる。自分の体重と重力が合わさった衝撃が片肩に加重される。

「……っ」

嫌な音と激痛が走った。痛みで頭の芯が少しづれているが、それを耐えて動く。

——動け

フルーは自分を叱咤すると、歯を食いしばって耐える。しかし喉を強く掴まれていたため、咳が込み上げてきて呼吸が上手く出来ない。酸素不足で朦朧とする意識の中、床の上を這うようにして移動する。

「待ちやがれ！」

しかし相手は多勢に無勢、フルーを取り囲むと床を這うフルーの背中を容赦なく踏みつけた。

「……んあっ」

複数人から何度も踏みつけられ、喉の奥から血の味が込み上げてくる。声を発することも出来ない。

「よく頑張るな。まだ逃げるか？」

フルーは途切れてしまいそうになる意識を意志の力だけで食い止めると、せめても抵抗に睨み付けてみせるが、その行為は火に油を注ぐようなものだ。男達は薄笑いを浮かべフルーを面白そうに見下ろしている。

「なあ行儀の悪いその足、一本ぐらい切っておいた方がいいんじゃないか」

「そうだな、痛みでおっ死ぬなよ」

なんとという会話をしているのだろうか。

フルーの鼻先に男達の持つ剣先の白刃が見えた。どうやら冗談ではなく本気のようにだ。フルーの脳裏に戦慄が走る。

「動くなよ」

フルーは、足首を掴まれた。なんとか逃れようと抵抗するが、強く掴まれた足首はびくとも動かない。フルーは最後の一瞬まで諦める気はなかった。だが朦朧とする意

識の中、劍が振り下ろされる風の音を聞いて、襲つて来るであろう痛みを備え、目を閉じて肩に力を入れた。

——助けてっ

瞬きより短い、刹那。

次の瞬間、想像していた痛みは襲つてこなかった。その変わりガシャンツと鋭い金属音が衝突する音が室内に響く。

フルーは恐る恐る目を開け、周囲を確認する。すると前には黒い人影が立っていた。よく見えないがその人物が自分に振り下ろされた劍を、同じ白い刃で受け止めていた。

「あつ」

「よく頑張った。ちよつと待っている」

目の前の影は、受け止めていた劍を押し返すとフルーから離れ、部屋の男達に向かつてゆく。その人は圧倒的なスピードで劍を振るい、男たちを次々となぎ倒してゆく。

室内に断末魔の叫びが響くと、床の上に男達の体が転がる。

フルーは倒れたまま、それを呆然と見ていた。

「……凄い」

そうしていると、もう一人別の誰かがフルーの横に近寄ってきた。

「大丈夫、起きられる？」

背中を支え、体を抱き起こしてくれた。左肩と背中が痛むが、なんとか身を起こすことが出来た。

フルーの前に現れた青年は、懐からナイフを取り出すとフルーの自由を奪っていた手首のロープを切ってくれた。

「ありがとうございます」

フルーは、縛られていた手首をさする。

「間に合ってよかった。はじめましてフルー、君の事はダニエルから聞いているよ」  
ダニエルの名前を知っているという事は、味方か。ようやく息が整い始めると、視界がクリアになった。

フルーは目の前の青年の顔をよく見ることができた。

「もう大丈夫だよ。今、警備隊が突入したところだから」  
そう言う青年の容姿には、どこか見覚えがあった。

——この派手なジャケットの色は……

「あなたは酒場で……」

そうだ。彼は酒場にいた。酒場でギターを演奏していた彼だ。

「覚えていてくれた？ そうギター弾いていた方だよ。俺の名前はエヴァリストゥジアン。エヴァと呼んでくれ」

「エヴァ、よろしく」

「ダニエルから話には聞いていたけど、フルーは本当に女の子みたいだね」

こんな事態に陥っているのに、なぜか明るさを失わないエヴァという青年。いったいダニエルは彼にどんな話をしているんだ。フルーはどう返答しているのか困った。

「は、はあ……」

「ダニエルがあまりにも君の事を話すから、勝手に嫉妬しちゃったけど」

「……嫉妬ですか？」

「おっとこれはまたの機会に」

エヴァはウインクをしてみせると、室内に目を配らせた。

「ローレンさん！ 大丈夫ですか」



「ああ、全員制圧した。下の奴らに女性の救出に来るよう伝えてくれ」

「了解しました」

エヴァはそう言い立ち上がると、フルーに——またね。と挨拶をして室内から飛び出していった。

「えっ……クロード？」

床に転がる男達を足で転がして確認している人影がこちらを振り向く。つかつかと歩いてきたかと思うと、フルーの前に膝を着く。

「またずいぶん危ないところだったな」

確かに声はクロードのものだ。しかしフルーの目の前にいる彼はいつもと少し雰囲気が違う。

クロードは、黒い服に黒の少し長めのかつらに、そして眼鏡をかけて変装をしていた。クロードの姿は、街の多くの人間に知れ渡っている。今回の作戦は隠密行動のため、変装をしたのだろう。よく化けていると思う。視界が悪かったとはいえ、フルーは目の前に来られるまで気づけなかったくらいだ。しかし、この格好どこかで見た出で立ちなのだが。

「なんだ、もしかして気が付いていなかったのか？」

『気づいてなかった』とはどういう事だろう。クロードのこの珍しい姿、どこかに見覚えが……

「……あつ」

フルーはある結論が頭に浮かんだ。クロードの今の服装は酒場にいたピアノ弾きの方と同じものだ。

「もしかして、あのピアノ弾きは……」

「ああ、結構溶け込んでいただろう。久しぶりにピアノを弾いたが、まだ結構いけるな」

クロードは右手の剣を床の上に下ろすと、フルーの頭に手を乗せポンポンと撫でる。「よく頑張ったな。どこか痛むところはあるか？」

クロードは、普段とは違い優しい口調でフルーに話しかけてくる。フルーは、ポカんと口を空けたままクロードを見上げた。空いた口が塞がらないとは正にこの事だ。

ではクロードとエヴァは、酒場の傍でフルーの事を見ていた事になる。つまりあの恥ずかしいウエイトレス姿も踊りも一部始終！

フルーは、最後の最後に特大の衝撃に頭を打ち抜かれ意識が混濁しそうだった。

「ほえっ」

自分は今、とてつもなく情けない声を出している自覚がある。

「フルー、大丈夫か？」

「う、うん、大丈夫、いや……駄目かも」

フルーは自分の発する言葉が変なのは気づいていた。しかし限界まで張り詰めた緊張の糸が切れ、今日一番の衝撃により頭の中が波打ったように揺れ動いている。フルーは、全身から力が抜けてゆくのが分かった。ゆらゆらと体の軸がずれ、体が床の方に傾いた。

「フルー！」

咄嗟にクロードが両手をさし出したので、フルーは床への激突は免れた。上半身をクロードに預ける形になった。しかし、もう動きたくなかった。瞼が異常に重く感じる。

「……疲れた、寝る」

不貞腐れた声で、そう言ったのまでは覚えている。遠くでクロードが自分を呼ぶ声

がするが、情報処理が追いつかなくなったフルーの意識は、そこで強制終了された。

\* \* \*

ダニエルは、建物の外で警備隊の指揮をしていた。

裏口からクロードとエヴァの両名を入れ、正面からは警備隊の本体を突入させる手筈を組んだ。

逃げ道もしっかり押さえている。連れ去られるフルーの後を追ひ、部隊を万全なものにするのに少々時間が掛かってしまった。

一刻も早く、中に突入して女性達とフルーを助けたい思いだったが、心を鬼にして部隊の配置が整うのを建物の物陰で見守っていた。

「フィンさん突入準備完了です」

剣で武装した一人が、ダニエルに現状報告にやってきた。

「では、突入します。なるべくこちらの被害は最小限に気づかれないよう素早く制圧してください」

「はい」

ダニエルは、緊張で手の平が汗ばんでいた。手の汗を何度もキュロットの裾で拭くが、手の平から汗が滴り落ちる。

時間がものすごく長く感じる。突入開始後五分で、エヴァがダニエルの元に戻ってきた。

「ダニエル、三階に女性達を発見。ローレンさんが三階は制圧したから、救助隊を入れて」

「わかったわ」

「エヴァ、首謀者達は二階で捕獲中よ。私達はそちらに行きましょう」

ダニエルとエヴァは連れ立って、建物の中に足を踏み入れた。途中警備隊とすれ違いう中、階段を上り二階のフロアへと足を踏み入れた。中には、警備隊に取り押さえられた用心棒らしい男達と、数人の年寄りがいた。

「あなたは！」

ダニエルは、その中に見知った顔を見つけた。

「お前さんは、あの時の」

相手もダニエルの事に気が付いたらしい。そこに居たのは一週間前、スリの少女に荷物をひったくられた老婆だった。

「あなた達がこの人攫いの首謀者！」

老婆はあの時少女にすられた鞆を今も後生大事に抱えている。

「それ見せていただくわ」

ダニエルは、何かに感づいて老婆から鞆を取り上げようとした。少し抵抗されたが、警備隊に囲まれているため、しぶしぶ従う。ダニエルは鞆の中を空けた。布製のその鞆は、中に小さな袋が入っている。その中の一つを空けてみると小さな木片が入っていた。その木片には絵柄が彫られているが、絵柄は丁度半分になっている。

これは、割符というものだ。何か取引する相手がこの半分を持っていて、示し合わせるのが習わしだ。

老婆は、ダニエルがそれを手にしているのを見ると、ばつの悪そうな顔をする。

「これをすられて、私達を取り返してきたから、あんなにお札を奮発したわけね」

ダニエルは無性に腹が立った。親切をしたわけだが、あるとき荷物を取り返してやり喜んだ老婆が、実は人攫いの首謀者で自分達も危うく片棒を担ぐところだったのだ。

ダニエルは、エヴァに割符の入った袋を差し出した。

「エヴァ、この人たちの処理は、そちらの管轄に任せたわ」

「了解。売買ルートはこちらで調べて報告するよ」

ダニエル達役人は幾つか管轄が存在した。地域や受け持つ担当が少しずつ違う。ダニエルの担当は居住区の内政が中心で、同行したエヴァは流通関係の担当官だ。今回は、流通ルートを特定するため流通官のエヴァの力を借りることにした。また彼は商業地区に顔が利く。

「お願いしたわ。あなた達、覚悟しておきなさい」

ダニエルはそう言うと言を返し、扉の方へ向かい三階へ駆け上がる。上階には女性達がいるとエヴァに報告を受けたからだ。廊下を歩いていると、警備隊の一人がダニエルに近寄ってきた。

「フィノさん、行方不明の届けが出ていた女性達は全員生存を確認出来ました。他にもリストにない数名を無事保護しました」

「わかったわ。全員健康状態が心配だから、近くの病院に運ぶ手配をしてください。医者とベッド数が足りなければ他の診療所に応援を頼んで。あと家族に連絡も忘れな

いでね」

「はい」

ダニエルは、的確に指示を出す。そして逸る気持ちを抑えて三階の小部屋に足を踏み入れた。

踏み入れた瞬間、異様な臭いに鼻を挽がれそうになった。中は溢れかえった血の臭いと、鼻を突き刺す異臭が充満していた。

ダニエルは思わず口と鼻を押さえた。ダニエルは今まで数々の現場を見て来たが、今回は特に強烈だった。迂闊にも数歩後ずさってしまった。

「ダニエル！」

そんなところに室内にいたクロードから声を掛けてきた。

「外で待っていたほうがいい」

「でも……ローレン！」

ダニエルは、クロードの腕の中にあるものを見て驚愕する。クロードの腕にはフルーが抱きかかえられていた。

「フルー、大丈夫なの！」



ダニエルは慌ててフルー顔に手を添える。大丈夫だ、温かい。息もしている。

「大丈夫、多少怪我をしているが気を失っているだけだ。これからドクターのところに運んでくる」

「ええ……お願い！」

クロードは、一度床の上にフルーを下ろすと彼の体を背負った。そして持っていた剣をフルーの太ももの下に横に通して、その上に座らせるようにして背負い直した。

「すぐ戻るが、後は頼んだぞ」

「ええ」

ダニエルはクロードとフルーの背中を見送った。

「ダニエルだめよ！　しっかりしなきゃ」

ダニエルは、自分の両頬と両手で勢いよく叩くと、瞳に力を入れる。男達の死体の転がる室内を、毅然と立ち入り、被害者の女性達に手を差し伸べていった。

こういう時、女性の自分の方が被害者の女性達を安心させることが出来るはずだ。

「さあ、もう大丈夫よ。お家に帰りましょう」

ダニエルは、一人ひとりに丁寧な声を掛けて行く。

5 友達とご褒美

\*

フルーの意識が戻ったのは、それから半日後だった。目が覚めた時、ドクターが傍らにいた。

「眠り姫パートツ、目が覚めたかい？」

ドクターは、フルーにブイサインをしてみせる。

「……ドクターおはようございます」

フルーはぼんやりした意識の中で、ドクターに挨拶をする。見慣れたドクターの姿は安心する。

「今回は記憶が飛んでいないようだな」

どうやらフルーの記憶喪失歴は前科一犯で止まったままのようだ。

「僕、どれくらい意識を失っていましたか？」

気を失う前の記憶もしっかりある。あの一連の事件からどれくらい寝ていたのだから

う。辺りを見回すとそこはよく知るシユラール診療所だということが分かった。

飾り気もない室内にベッドが複数並んでいる。ここは入院施設の大部屋だ。部屋には大きな窓があり、シユラール医院の中庭が見える。中庭といっても、そこは物干し場だ。竿には、シーツや包帯が干されており、ゆらゆらと風にそよいでいる。平和な光景だ。

「もう昼過ぎだ」

あの事件が未明だったとすると、半日ぐらい寝ていたようだ。

「そうですか」

フルーはいつものように起き上がったが、全身に痛みが走りベッドの上でもんどり打つ。あまりの痛みにも腹筋に力が入る。フルーは、痛みで半年前の自分を思い出した。いや、あの時より重症かもしれない。

「ふーふーふー、いったたた……」

「まったく、背中への打撲痕数箇所、筋肉も傷んでいる。あと左肩の脱臼、首の痣と傷。唯一の救いは、骨に異常がなかった事ぐらいか。よくもまあこれだけこさえたな。内臓に損傷があるかもしれないからしばらく入院だ。安静にしてなさい」

ベッドを見下ろすドクターはとても厳しい顔をしている。

「すいません。お世話になります」

痛みから薄っすら涙が出る。これでは迂闊に寝返りも打てない。

「花ちゃんは気にすることはないさ。ローレンとダニエルをこっぴどく叱っておいてやったからな」

そうか、あの二人がドクターに怒られたのか。その光景は是非見てみたかったと思う。あの二人がどんな顔で怒られていたのだろうか。フルーは興味が沸いた。後ほどゆっくりドクターに聞くとしよう。

「それにしても、ローレンが血相変えてその格好をした花ちゃんを運び込んで来たときは流石にびっくりしたぞ」

ドクターはフルーの枕元を指差した。そこには水色のジャンパースカートとブラウスが綺麗に畳まれて置かれていた。一週間苦楽を共にしてきた戦友がいた。もうこの服に袖を通すことがないことを心から祈りたい。フルーは今、女装用の服から、診療所の患者用寝巻きに着せ替えられていた。そうかクロードがここまで運んできてくれたのか。これで運ばれるのは二度目になる。

「また驚かせてしまいましたね。ご迷惑をおかけしました」

「いやいや、その衣装を着た花ちゃんを脱がせるのがちよつと楽しかったからいいさ」  
ドクターはそう言うのとニヤニヤと笑う。

「もうドクター！……いつつ！」

思わず大声を出したことで肩と背中に痛みが走り硬直する。

「よしよし元氣そうだ。ところで面会人が来ているが会えるか？」

「面会？」

ドクターは、病室の扉の方を指差した。そこには一人の金色の髪をした少女が佇んでいた。

「ジョゼ！」

そう、一緒に人攫い一味に捕まっていた少女だ。彼女も診察所の寝巻きを着ている。ジョゼはドクターに手招きを受け、フルーのベッドの横にそろそろと歩み寄つて来た。

「よかった。怪我はもう動いても大丈夫なの？ お姉さんの容態はどうなの？」

フルーはジョゼを質問攻めにする。

「うるさいな、人の事より自分の方を心配しろよ」

相変わらずの悪態ぶりは健在のようだ。

「ごめんごめん」

ジョゼは男達に蹴られていたが、自分より元気なようだ。

「オルガお姉ちゃんも他の女の人たちもみんな無事だよ。みんな治療を受けているよ」  
「そう……よかった」

フルーは本当に良かったと心底思った。そして、あそこにいた子達が全員無事ならこれくらいは傷、別にいいかと思えてきた。

「あんたは大丈夫なのかよ」

フルーはドクターの方を見た。

「全治二、三週間ぐらいだな」

ドクターはフルーの診断を下した。あれだけの大立ち回りをして、この程度で済んでよかったとしよう。

「だってさ……しばらくベッドの上でサボることにするよ」

「ダニエル姉ちゃんから全部聞いたよ」

「ダニエルから？」

ダニエルは一体何をジョゼに話したのだろう。

「……あんたさ、男のくせに、女の格好して困になったんだってな」

「実はそうなんだよね……うん」

ジョゼはフルーを女性だと思っていたに違いない。ダニエルからその事実を聞いて、どう思ったのだろうか。

「あんた達、無茶苦茶だな」

御尤も。フルーは苦笑いをするしかなかった。

「……あのさ、助けてくれてありがとうな」

ジョゼは、顔をうつむかせ小さな声でお礼の言葉を述べた。

「どういたしまして」

「なあ、あんたの名前教えてくれよ」

「そうか言っただけじゃなかったね。僕の名前はフルールだよ。みんなはフルーて呼ぶよ」

「名前まで女みたいだな」

子供は素直だ。しかしその苦情はクロードに言って貰いたい。

「よろしくな、フルー」

「改めて、よろしくジョゼ」

フルーはジョゼに手を差し出した。

ジョゼはフルーの手を掴む。小さな手がフルーの手の中に納まる。

二人は、何がおかしいわけでもなかったが、くすくすと笑い合う。

お互い風変わりな友達が出来てしまった。夏の終わりの昼下がりだった。

あとから聞いた話だがジョゼは、姉の体調が回復するまで、ダニエルの紹介でロクサーヌの食堂で働く事になった。元の素行が悪いので、試用期間中ちゃんと働いたら、きちんと雇ってもらえると条件付きだ。

そのダニエルが昨晩の後処理の仕事に忙殺され、ようやくフルーの元に駆けつけたのは、フルーが目覚めてからさらに半日後だった。病室に入りフルーの姿を見つけたら、駆け寄り抱きついた。

「フルー！」

「ぎゃあっ！」

フルーは起き上がって病室で遅めの夕飯を取っていたのだが、まだ痛む肩にダニエルが容赦なく抱きついてきたので、強烈な叫び声を上げた。



「ご、ごめんなさい！」

そういうダニエルは、目に涙を一杯貯めていた。その瞳の下にくつきりと深くまが浮いている。その疲れた表情をみて、痛いのは少し我慢しようと思った。だがまた抱きつかれたら困るので、彼女から少し距離を取る。

「ああ、でも良かった。自分が言い出した事だけど、もう生きた心地がしなかったわ」  
「そ、そうですか……」

そうだった。囮作戦を言い出したのはダニエル自身であった。酷い目に合ったのも全て彼女が言い出した事が発端だったことを思い出した。

ダニエルより一足先に病室に見舞いにやってきたクロードは、フルーが目を覚まして病室で食事をしているのを確認すると、空いていた病室のベッドに倒れ込んだ。昨晩の徹夜と連日の張り込みが響いたのだろうか。今もすぐ横で静かな寝息を立てて寝ている。フルーは、こんな人前で無防備にしているクロードを見たことがなかったので、正直びっくりした。しかし、かわいそうなので少しそのまま寝かせてあげようと、布団をかけてあげた。腑に落ちない点もあったが、フルーは沢山の人に心配されたのだと思った。

「そうだ、見てフルー！ 特別ボーナスあるから許して頂戴！」

ダニエルは封書に入った書類を取り出すと、フルーの前に広げてみせた。

「なにこれ……」

フルーはダニエルから書類を受け取り、目を落とす。

内容は難しい言葉が並び、最後の方に大きな文字で……

「貴殿を……特務官補佐役に任命する」

と書かれて最後に赤い押し印がついていた。

「はいっ？」

「やっとう受理されたか」

今までベッドで寝ていたクロードが眠そうな顔付きで起き上がると、フルーから書類を奪い取り文章の中身を確認してから、フルーに再び書類を押し付ける。

「ということだ、よろしくな補佐。これで俺の仕事が楽になるぞ」

「ローレン、上層部がこれからもガンガン仕事入れるって言っていたわ」

「勘弁してくれよ」

フルーはクロードとダニエルの顔を両方見比べる。ダニエルはフルーをニコニコ見

ているし、クロードは特にいつもと同じだ。

フルーは、信じられなかった。アルデウイナに籍を置くならまだしも、役所の役職を得るなんて、身分不相応にもほどがある。

——そうだ、これは夢に違いない。そうだ僕はまた意識を失っているんだ。

そんな事を考えていると、突然クロードが、じつとフルーの方に視線を向ける。

「何？」

クロードは無言のままフルーに手を伸ばしてきた。

そして、何を考えているのかフルーの柔らかい両頬を指で摘んで思いつき横に引っ張った。

「痛ひゃい。あにするんだ」

口を横に引かれているので、発する言葉の発音がおかしい。

「痛いかな、じゃあ夢じゃないみたいだな」

「！」

クロードはフルーの考えがお見通しだった。フルーは驚きのあまり目を見開く。

「そんなに驚くな。お前は、すぐ考えが顔に出るからな。早く治して帰って来いよ」

頬から指を離すと、珍しく顔の表情を緩めて笑っている。

「夢じゃない？」

フルーは自分の身に起きている現実を知り、書類を持つ手が震えはじめた。

「フルー、あと諸手続きは後日傷が治ってからでいいから、あとこれ入院している間に目を通して覚えてね」

ダニエルが、新たな封筒から書類の束を取り出した。

「そんなに！」

「これ一部よ。また明日続きを持ってくるわ」

「どうやらフルーの入院生活は、静かに寝ていられるようなものにはならなそうだ。  
「そんな」」

これがフルールという名になった少年が最初に紡いだお話。

## あとがき

はじめましてこんにちは、ほたです。この度は、私の拙い本を手にとっていただき誠にありがとうございます。

花の中の花一巻は、文庫版にして再販いたしました。初版本は、生まれて初めて作成した本のため、直したいところ満載でした。ほんと、お恥ずかしい限りです。文庫版はこっそり加筆修正させていただきました。

さて、少し作品の事を触れたいと思います。副題の『Fleur de fleurs』はフランス語で『花の中の花』という意味です。作品で言うと、タンポポ畑に落ちていたフルーを意味しています。昔、ニナリツチで同名の香水が販売されておりました。その名前を聞いた時、とても衝撃を受けました。いつかこの言葉を使って何かを制作してみたいと、思ったのを今も覚えています。

ニナリツチの香水からは、バラや蘭のような豪華な花をイメージしますよね。「私は花の中の花なのよ！」という感じに。

しかし、ほたはこの言葉から、ちよつと違う想像をしました。花屋で主役を引き立たせる脇役の花。花の中に隠れている花。草原などの花畑に咲く一輪の花。そんなイメージを受けました。そして悩んだ挙句、題材に子供の頃大好きだったタンポポを選びました。そういえば、子供の頃

は、『タンポポ』と発音できず『たんここ』と言っていましたっけ。  
うちのたんここが今後どのような化けてくれるのか、どうかご期待ください。  
次回は、文庫二巻または、三巻でお会いできれば幸いです。

二〇一四年十一月  
ほた